

その日、花子は三十二歳になった。

十月の第一土曜日だった。今年一番の大型台風が来る、という天気予報で、花子はこの予定のない誕生日の休日に、天候を理由に一日家にいられることを幸運に思った。

しかし、朝起きると、嫌な予感が当たって、花子の気分は一瞬で不快なものになった。母親が家にいた。

体調が悪い、とか言つて、また会社を休んだのだろう。リビングルームのテレビを点けっぱなしにして、その隣の自分の部屋の扉を開け放し、ベッドに寝ている母親は、いつものように、眉間にしわを寄せて、寝ていた。

いつからか、花子は休日に母親と家に二人でいることに耐えられなくなっていた。

母親と二人暮らしを始めてもう十年ほどだが、二十代の頃は、さほどそれを苦痛と思わなかった。ただそれは、当時は休日ほとんど外出していたし、母親もいないことが多かったから、感じなかっただけなのかもしれない。機会が少なかった分だけ、今ほど圧迫感を感じることが少なかったのだろう。

母親は五年ほど前に転職をして、土日出勤で平日休みの生命保険会社のコールセンターで働いている。花子が働く会社は土日休みなので、休日が重ならないため、花子はめっきり休日の予定が減った三十歳を過ぎてからは、土日は一人の時間を楽しんでいた。その、一人の時間を邪魔される、母親がよく使うズル休みの日は、だから、花子にとって最も忌むべき日だった。花子は土曜日の朝もしくは昼に起きて、母が家にいるとすぐに不機嫌になった。特に予定がない日には。それが誕生日ともなれば、さらに不機嫌はつもの。だがその日の花子のイライラは頂点を超えて、最早あきらめの風が、心に広がっていた。

2DKの小さな部屋は、狭すぎる。花子のため息をつく。よく、友達に一人暮らしをすればいいじゃないか、と言われる。けれども、花子には貯金がなく、クレジットカードのキャッシングで借金すらこしらえている有様だった。そんな状態で一人暮らしなどできる筈がない。

気を紛らわせようとテレビを点けて、土曜の昼にやっている自分世代の女性をターゲットにした情報番組を見る。音量は母親を起こさないように大きくしすぎない、起きるとこの狭いリビングに母親がやってくる、それは耐えられない。起きたばかりの、この体がナイーブになっている時間帯は、せめて一人で静かに過ごしたかった。

リビングルーム、と呼んでいるが実際にはダイニングキッチンリビング代わりにしてそう呼んでいるのだった。六畳の小さな部屋は片側がキッチン、窓側にソファを置いて、部屋の真ん中に小さな食事テーブルをおいている。その正面に大きな冷蔵庫。その窓側の隣にテレビ。明らかに手狭である。けれども、世田谷区の二子玉川で家賃十万円という安さに甘んじて、すでに五年の歳月がすぎた。

二子玉川に住んでいる、と言うと、

「すごい、お金持ちなんだね」

と決まって言われるが、実態はこんなものである。駅から徒歩十五分。決してアクセスが良いとはいえないこの付近から多摩川沿いに陸の孤島といえる地域がはじまり、駅から遠くなればなるほど、家賃は当然安くなる。

花子の母が突然家を出て実家に戻り、父や花子・弟と、別居を始めたのは、花子が大学一年の時だった。それまで教育ママだった母親は、花子が中学校受験で燃え尽き、中学高校一貫の学校でろくに勉強をせず、大学受験に失敗したあたりで、何かがふっきたらしく、四十歳をすぎて突然、オーストラリアに一ヶ月、ホームステイ留学に行ってしまった。何が起きたのかは不明だが、英語を習っていた外国人家庭教師に恋をして、海外フリークになってしまったのが、実際の理由だったらしい。

母はそれからイギリスに行き、アメリカに行き、イギリスが最も気に入ったらしく、その後何度もイギリスに行った。ホームステイ、旅行合わせると優に二十回を越える。今働いている会社の前に十年ほど勤めていたコールセンターでは管理職についていたので、当時は稼ぎはそれなりにあったようだが、その給料をすべて、年に一度か二度の海外遠征につきこんでいた。社会人になった花子と二人でマンションを借りて暮らし始めるまでは、母親は実家暮らしで生活費もさほどかかっていなかったはずなのだが、給料だけでは足りずに少なからず借金でまかなっていたことは、今の家に引越す前、一度マンション購入を検討して、契約審査をしたときに判明した。

母親の金回りのだらしなさは、家族の中では暗黙の了解事項だったが、このときばかりは、花子も言葉がなかった。だが、今では花子が三十万円ばかりとはいえ、借金を抱えてしまっている。花子は身体に流れるこの血に恐怖すら感じた。けれども、しつかりとした返済計画はたてているし、数か月後に返済が終われば、ちゃんと貯金もできるようになる。三十五歳までに結婚することを目標にしているから、それまでにはクリーンな身体になって、ある程度の貯金もできているはずだ、というのが、いささか楽観的すぎる花子の将来計画だった。

もちろん、誕生日に予定がないくらいなので、花子には恋人はいない。けれども、人並みに結婚願望はあった。一人暮らしをしないのも、金がないから、というのもあったが、どうせ家を出ていくなら、もう結婚するタイミングがいいだろう、という考えからでもあった。

マンションの賃貸契約の更新は来年の八月だった。それまでに絶対結婚してやる、と花子は三十二歳の抱負として決意をした。でもすぐに、そのスケジュールではさすがに短すぎる、と怖じ気付き、来年の八月までには婚約者をつくる、という目標に下方修正した。

「ああ具合悪い、紅茶私にも入れて」

ついに母親が起きてきた。背は低いが太っている母は丸まるとしていて、この狭いリビングに来ると途端に部屋が暑苦しくなる。花子は心の内のため息をついた。それでも電気ケトルのスイッチを入れ、お湯を沸かした。イギリス好きの母親は当然ながら紅茶党で家には常

時、紅茶が、ティーバッグのもの、茶葉だけのもの、併せて十種類くらいはおいである。お金持ちの家ならともかく、母子二人の小さな世帯にこれだけの紅茶のストックは明らかに必要がなかった。

さらにカップは、イギリスに住む母親の友人が副業でネット販売しているアンティーク食器を大量に購入していて、たしかに上品でデザインの美しいティーカップたちなのだが、これまた狭い我が家には不釣り合いなものだった。それ以外にも、買い物好きで派手好きの母親は、高級バッグに高級ブランド靴、分不相応な品物を大量に持っていた。

花子はそれらのお下がりを貰って、自分では買うことはなかった。もう一生バッグは買わなくていいと思っている。無駄遣い癖の血筋もここで絶やさなくてはならない。

「あら、今日、花ちゃん誕生日じゃないの？」

紅茶を飲みながら、少し落ち着いた様子を見せた母親が言った。

「どっかいくの？ 彼氏がいない誕生日なんて悲しいわね」

うるせーな。というのが花子の心の中の返事だったが、それを声に出すのはさすがに彼女のあるかなしかのプライドが許さなかった。

「行くかもしれないけど、台風だからね」

悪天候にかこつけて、花子は話をそらした。雨はまだ降っていないなかったが、外は曇っていて、灰色の低気圧が昼下がりの街を暗くしていた。

「ふーん」

母はそういって、またベッドに戻っていった。どこが具合が悪いのだろう。そういえば、母親は私達が小さな頃から、ときおり、もの凄く不調を訴えて、夜中に救急車まで呼ばせたこともあった。だが、その割にさしたる大病もせずにもそろそろ還暦を迎えようとしている。オオカミ少年ならぬ、オオカミばばあもいところだった。

それにしても、今日一日をどう過ごす？ いくら夜に今年最大級の台風が来るかもしれない、とはいえ、さすがに年に一度のバースデーを丸一日、狭い部屋に母親と閉じこもっている訳にもいかなかった。駅前まで行って、本屋をめぐって、カフェでお茶でもするか…。だが、数年前に駅前にできた商業施設のおかげで、二子玉川の休日人口は一気に増え、午後ほどの店も大混雑だった。とても一人でゆったりと過ごせる雰囲気ではない。じゃあ、美術展でも行く？ 何年か前までは休日にその日いきなり連絡してもつかまる友人は何人かいた。しかし三十二歳になった今、それらの友達はみな結婚していて、男女ともにそう気楽に休みの日に誘える人間はいなかった。やりたいことはすべて一人でするしかなかった。こうしておひとり様、というやつになっていくのだろうか。

だが、神様はいるもので、鬱々とした気分ですmartフォンをいじっていると、夕方近くになって同じ浴線に住む友達の子百合からラインのメッセージがきた。

「花ちゃん、誕生日おめでとう♡ 夜ひま〜？ 三茶にいいお店があるから一緒に飲もうよ」

花子は感謝してもし足りない気持ちで、「ありがとう、いきます」と即レスした。そしてそそくさと風呂に入った。

リビングルームで化粧をし、髪を乾かしていると、さすがに起きてきた母親が

「なに、でかけるの？」

と聞いてきた。

「うん」

「何時に帰るの？」

「わかんない」

「台風が来るっていうんだから、早く帰ってきなさいよ」

もう三十二歳なんだから、親にそんな心配をされる必要はない。花子は返事をせずに母親に背を向けたままドライヤーをかけ続けた。

二十四時間ぶりに吸う外の空気は、雨の降る前の湿気を帯びて、重苦しかった。それでも花子は、誕生日を祝ってくれる人がいることが嬉しくて、持ってきたビニール傘で、アスファルト道をたたきながら、機嫌よく街を駅に向かって歩いていった。そういえば花子の誕生日は雨が多い。いつか、こんなふうには、誕生日に夜の街を、でもその時は男性と一緒に歩いていた。けれどもそれも、過ぎ去った思い出である。駅に着いたところで花子は、百合子にメッセージを送った。

〈今、二子の駅だからあと二十分くらいでつくよ〉

東急電鉄の二子玉川の駅は、その名の通り、多摩川が支流と合流して二股になっている、その上に架けられた橋の上にある。川の上の駅。今は夜で、さらに曇っているから、たいした景色ではないが、昼で晴れていけば、プラットフォームから遠く富士山を望むことができ。朝から富士山をみると、なんだかありがたい気持ちになったりもする。岸辺の草むらの黄緑色と、おだやかな流れに煌めく水面を眺めると清々しい気分になれた。夜は一転、底なしのうごめく暗闇が不気味だったが、それはそれで魅力的だった。自分が死ぬなら、もし、自殺することがあるなら、多摩川に身投げしよう、などと物騒な誓いまで花子はたてているほどだった。もちろん、自殺するつもりなどない。どんなに人生がつんでしまっても、自殺だけはしないだろう。そんな度胸が自分にあるとは、花子は全く思えなかった。

三軒茶屋駅で降り、百合子の送ってくれた店のマップをたよりに、国道246号線沿いの道に出た。飲食店やスーパーなど雑多な店がひしめきあう商店街をぬけると、場末の空気が漂う、小さな飲み屋が軒を連ねる一角に出る。道路を一本内側に入ると住宅街になる地域で、百合子が誘ってくれたのは、彼女の家のすぐ近くに新しくできたというカフェバーだった。花子がそれとおぼしき店を見つけると、ちょうど百合子も着いたところで、二人は具合よく店の前でおちあった。

時間は夜九時を過ぎていて、狭いカウンターには客がいっぱい入っていた。何とか隅

の席を空けてもらって百合子と二人カクテルを頼み、小さく乾杯をした。彼女はすでにこのバーの常連のようで、顔立ちの綺麗なバーテンダーの男に親しげに話しかけていた。

「花ちゃんていうの、よろしくね」

そう百合子はバーテンに花子を紹介した。

「しかも今日、誕生日なんだよ」

「それはおめでとございます」

イケメンのバーテンはちよつと馴れ馴れしい口調で言った。

「ありがとうございます」

花子はそう言っただけで恥ずかし気にカクテルを飲んだ。

「いくつになったんですか？」

「三十二です」

「あ、ほんと？　じゃあ俺と同じ年じゃん」

とイケメンは急にタメ口をきいた。

「そうだよ、だって私の友達だもん」

同じくタメの百合子が言った。

「へえ、じゃあこの辺も同年代っすよ。いっこ上だけど」

そう言っただけでイケメンは直角になったカウンターの花子の右手側に並んでいる人たちを示した。そこにはカップルと思しき小洒落た服装の男女と、金髪の小柄な男が座ってちよつと騒がしく会話をしていた。百合子も彼らとは前にも顔を合わせたことがあるらしく、割と親しげに見えた。三人の奥には三十代半ばくらいの広告代理店に勤めているような男性、さらにその奥には四十代くらいに見える女性二人が座っていた。

「君、今日誕生日なん？」

と突然、金髪の男が花子に声をかけてきた。

「はい」

「いくつになったの？」

「三十二です」

花子は先ほどと同じ質問に、今度は少し恥じらいながら答えた。年齢を堂々と答えられなくなった自分におかしな違和感を覚えながら。

しかし男はそんな花子には構わず、

「まじか。二十七、八くらいかと思ったわ」

と言っただけ、

「誕生日だから、彼女に一杯飲ませてあげて」

とバーテンに声をかけた。花子は男のオーダーでお替りのデイトオレンジを作ってもらった。

そこから何やら会話は盛り上がり、午前一時に閉店したあとに、残っている人たちでカラオケに行こう、という流れになった。

金髪が特に熱心に行きたがっている様子で、花子も百合子も酔っていたから、適当に流れに身を任せた。イケメンのバーテンは店仕舞をしてから来る、とのことで、カップルと金髪の男と、百合子と花子とで先に、駅前のカラオケボックスに向かった。

外に出るといよいよ雨は降りだしていたが、大型台風、というほどの勢いはなかった。誰かがさつき、「台風直撃は明日の昼過ぎだつてよ」とスマホを見ながら言っていた。いずれにしても、最悪タクシーで帰れる距離なので、時間を気にする必要はない。

カップルと百合子は傘を持っていたが、花子と金髪は持っていなかった。イケメンがお店に置いてあった忘れ物のビニール傘を一本貸してくれた。それで、金髪と花子は相合傘でカラオケに向かうことになった。

バーカウンターの椅子に座っていたので、店内にいた時は分からなかったが、立ち姿の金髪男は、背が低く、身長一六〇センチメートルの花子と大して変わらなかった。そして、少し離れたところで見えていた時には、何となく全身黒いな、くらいの印象だったのが、あらためて服装を眺めると、黒の革ジャンパーに細身の黒いダメージジーンズ、同じく黒い革のブーツ、という随分ロックないでたちだった。

彼は、かなり酔っているように見えた。あつかましく花子の肩を抱いて顔を覗き込むようにして、「ええ女やな」と言ってきた。花子はもつとも気になっていた質問をした。

「お仕事は何をされているんですか？」

「音楽よ。ギターを弾いとる」

「へえ、そうなんですか。バンドに入っているんですか？」

「いや、フリーのギタリスト」

まあそういう感じよね、と花子は納得した。

「はなちゃん、彼氏おらんの？」

と男は自然な感じに聞いてきた。

「いないですよ。だって誕生日に予定がないくらいだし」

「そっか」

「彼女いるんですか？」

「いるけど、もしはなちゃんと俺、気が合えば、別れてもええよ」

と男は言った。この初対面で彼女と別れてほしいなんて一言も言っていないんだけど、と会話の流れに不自然さを覚えながらも、花子はその言葉を聞き流して笑った。

店までの道のりでは、軽く肩を抱かれる程度だったが、カラオケの室内ではついに、「チュー」をする仲になってしまった。カラオケまでの道でも、店に入ってから男はずっと花子にひっついていたので、当然、隣り合って座り、座ると何となく自然に「チューして」と言ってきた。花子は、他の人もいる中で、もめ事を起こすのも気が引けると思い、それにこたえた。それから何度かキスをして、他の人達も当然、それを見ていたのだけれど、彼は余りに気にしていないようだった。花子も深くは考えず、男のなすがままにされていた。

カラオケの途中でトイレに行くために花子は席を立った。女性用トイレは一つ下の階にあったので、階段を下りて行った。トイレを出ると、花子は例の男が廊下の向こう側で煙草を吸いながら待っているのが、驚いた。男は表情を変えずに手招きして、花子は大人しく指示に従った。そこでまたキスをした。小汚いカラオケボックスのよどんだ空気の中、立ったまま、抱き合っただけ。しばらくそうした後で、先に戻っていて、と言われ、花子は一人で部屋に戻った。他の人達は相変わらず、歌をうたっていた。

百合子がどう思っているかは、気になるところではあったが、ひとまずは皆見て見ぬふりをしていたので、花子はそのあとも、時折男にキスをされたり、するように言われたり、お酒を口移しされたりしながらも、他は普通に振る舞っていた。つまり自分も歌ったり、他の人の歌を聞いてそれを口ずさんだり、手拍子したり、拍手したり、飲み物が来たら奥に回したり、していた。

イケメンのバーテンは一時間くらい経ってからやって来て、店にいた時よりも大分くつろいだ感じで、疲労感を全面に押し出していた。それでも友達三人の熱烈なリクエストで一曲歌った。彼は、元はプロの歌手だった、ということだった。

「今もたまにライブハウスとかで歌ってるらしいよ」

と後で百合子が言っていた。イケメンが歌う時だけは金髪のギタリストも

「ショウが歌うで」

と言って、花子に始終向けていた顔を友達の方に向けていた。けれどもショウはプロの意地なのか遊びのカラオケで本気で歌うことはしないようで、ふざけた調子のまま歌い終えたので、彼が本当に歌が上手いのかどうか、花子にはよくわからなかった。

カラオケの終了時間が来て、部屋をばらばらと出る時、花子は百合子に近づいて

「ちよつと、変なことになっちゃってごめん」

と小声で言った。

「まあまあ、いいんじゃない」

と百合子は苦笑いしながら言った。

「でも、気をつけなね。あいつら、ろくでもないから」

あ、一人じゃないのね、と花子は思ったが、他の人達の手前、深くは聞かなかった。お勘定はきっかり割り勘で、特に誰が儲けている、というわけでもないんだな、と花子はうつすらと考えていた。

カラオケボックスの出口のところで、明け方に解散するときがありがちな、『ラーメンでも食べていくか？ どうするか』議論が始まっていた。すると金髪の男が花子に近づいてきて「俺んちくる？」と聞いてきた。花子は首を振った。

「彼女いるんでしょ？」

「それはどうにかする。渋谷いく？」

渋谷というより道玄坂ね、と花子は心の中で思った。そして再度頭を振った。

「今日はダメ」

「なんや。じゃあ、今週どこかでデートして」

花子は話を切り上げるために頷いた。他の人達による話し合いで、ラーメン屋に行くことが決定されていた。花子はまた金髪と相合傘で歩き始めた。歩きながらも男は何度か「チュー」を求めた。

「ねえ、今日は本当にダメなん？」

と男は何度か食い下がった。

「うん。だって、私、あなたの名前も知らないし」

そういえば、聞いてなかった。と気づいて花子はますます自分の現状を馬鹿らしく思った。

「トモユキ」

男は少し投げやりに言った。

「トモユキ」

男に肩を抱かれて横断歩道を渡りながら、花子はリピートした。けっこう普通の名前なんだな、と思った。

早朝五時のラーメン屋はおそらく同じような夜を過ごした人たちでカウンターはほぼ埋まっていた。

テーブルは空いていたので、カップルと、花子と金髪の男、百合子とイケメンという三組に分かれて座る形になった。とても若いカップルがするように金髪の男と並んで座った花子はこれまでよりも少し明るい所で男の横顔を見ることが出来た。特徴的な服装に気を取られて余り気にしていなかったが、顔立ちそのものは悪くない、というより良い方だった。目がぱっちりとしていて女性的な顔立ちだった。鼻は、形が良いが少し大きいような気がした。唇はぼてつとしていた。しかし全体的に疲れが滲んでいた。それは夜遊びしたせいのようにも見えたし、彼のいる世界独特の空気がもたらしたものにも思えた。

一人一杯も食べられない、ということ、しょうゆラーメンを二人で一杯注文した。花子もとても食べる気は起きなかったが、メンマとチャーシュー一枚だけでもらって食べた。男も半分くらい食べて、あとは残していた。

「出身はどこなんですか？」

「兵庫」

「神戸？」

「いやもつと西の方。岡山の近く」

「ふーん」

聞いても分からないそうだったので、花子はそれ以上聞かなかった。

「はなちゃんは一入暮らし？」

「ううん、母と二人暮らし」

「あそう。俺、去年お母さん亡くしたのよ」

と男は表情を変えずに少し疲れた顔のまま、花子を見て言った。

「やっぱりマザコンやったね」

花子は視線を落とす。出会ったばかりの人間にそれほど深い同情心が起きるわけでもなく、でも軽々しく答える言葉もなかった。当り障りなく、

「おいくつだったんですか？」

と聞いた。

「六十は過ぎてたから、若すぎるてことはなかったんやけどね」

男はそう言って一口水を飲んだ。

「五回流産してやっとできた子が俺やったん」

男は花子の目を見てさらっと言った。花子は随分あけすけな人だな、と思ったがまた当り障りなく、

「ご兄弟は？」

「おらんよ。一人っ子。君は？」

「弟がいます」

「あそ」

彼はカラオケにいた時よりも少し他人行儀に見えた。綺麗な二重の目が大きな、整った男の横顔から想像するに、きっとその亡くなった母親というのは可愛らしい人だったのだろう、と花子は考えていた。すると隣のカップルが唐突に「箸の持ち方、どうなってる？」と聞いてきた。

「うち、お父さん礼儀に厳しいから、今この人に教えてるところやねん」

と彼女の方が言った。

「箸の持ち方、ちゃんとせえへんと、結婚のあいさつにも行かれへん」

と彼氏の方が口の端を曲げながら言った。

「あれ、まだいっとらんの？」

と、トモユキが言った。

「来月や」

と彼氏の方が返答した。

「結婚も大変やな」

花子も箸の持ち方に自信が無かったので、ちょっと持ってみたが、「使ってるのと見ないと分からんな」と彼女はあっけらかんと言った。

トモユキも箸を持ったが、特に彼女も彼氏の方も何も言わなかった。たぶん、ちゃんと持っていたのだろう。

百合子とイケメンとは花子の右手側のテーブルで、何やら話し込んでいた。こんな早朝から何をそんなに深刻に語り合っているんだろう、と花子はちらりと思った。

六人の男女はまたバラバラと店を出て、三つの組に別れて駅へと向かった。カップルは途中でタクシーに乗って行ってしまった。歩いてすぐの駅前で、花子はバーテンと百合子と別れたが、花子を送るといふ口実で金髪の男は改札の近くまでついてきた。男は、方角は反対

の方に住んでいるらしかったが、タクシーで帰る、と言っていた。

改札の手前の階段の脇にコインロッカーがあつて、その陰に隠れて二人は、また立ったまま抱き合つてキスをした。人通りが増えてきて、最初は人が通りがかる度に一応離れてはいたが、そのうち気にせずそのまま続けるようになった。トモユキは一度だけ花子のスカートの中に手を入れて太ももを掴むようなことをしたが、それ以上はさすがにしなかった。

「明日は俺予定があるから、あさつて会おう」

と体を離して男は言った。

花子は、予定が無いのは分かつていたが、

「多分大丈夫だと思う。確認して連絡する」

と、ちよつと曖昧に返答した。

「ちゃんとデートしろよ」

と男はにらみつけるような表情をした。女の子みたいな顔立ちでしかも体が小さいので威嚇する子供にしか見えない、と花子は思った。

一人になって電車に乗ると、どつと疲れが出た。朝方の下り電車は思ったより乗客がいたが、座席に着くことはできたので、花子は深く腰掛けてしばらく呆然としていた。二子玉川駅について、やはり思ったより多い降車客たちと共に改札に向かう下りのエスカレーターに乗った。プラットホームから雨の降る灰色の空が見えた。花子は本当に大型台風なんて来るのかな、とぼんやり考えた。

駅ビルの間の舗装された道を抜けて、家路に着く。ビニール傘の下から、高層マンションを見上げる。花子はいつかの誕生日の帰りもこうやって帰り道に傘の下から同じ景色を見上げていたな、と思った。そう、二年前の誕生日だ。その人はもう結婚してしまった。その日は多分、人生で最も幸福な一日だった。けれどもそれから三か月とたたずに、彼とは別れてしまった。そしてそれから私は彼氏もつくらず、もちろん結婚もせず、誕生日に見知らぬ男、しかも自称ミュージシャンの名前も知らない男とディープキスするような女になってしまった。

だが、そんな考えも、たいして花子の心を暗くするわけではなかった。たぶん、あの男とセックスくらいはするだろうが、それが何か自分の人生を決定的に変えてしまうようなこととはないだろう。ただ過ぎていく人生のちよつとしたエピソードに過ぎなくなるだろう、きつと、思ったよりもずつとすぐに。

家に着くと、花子は母親を起こさないように、玄関から続く短い廊下の左手にある自分の部屋にすぐに入った。服を部屋着に着替え、廊下を挟んで反対側の風呂場にある洗面台で手を洗った。鏡に映る顔は少しやつれていたが、いつもの仕事帰りよりはずつとましな顔をしていた。

花子は風呂場の横にあるトイレに行つて、自分の部屋に戻り、ふと気づいてスマートフォンをチェックした。予想通り、トモユキからメッセージが来ていた。

〈今日はありがと。ゆっくり休んでね〉
とあった。

〈こちらこそありがとございます。おやすみなさい〉
花子は当り障りなくそう打つと、ウサギがピースサインを出しているメッセージスタンプをポンと送ってベッドに潜り込んだ。

起きると昼の十二時を回っていた。ベッドの上で、感覚を研ぎ澄ませ、家の中に人の気配がないことを確認する。たぶん、いないな。と花子は思った。しかし念のため確認はしないといけない。

重い体を伸ばし伸ばし、這い出るようにしてリビングに行ってみると、予想通り、母親はいなかった。台風という理由はつけようと思えばつけられただろうが、昨日の様子からして、体調もそうひどい訳ではなさそうだし、明日は休めないから、というようなことを、母は昨日言っていた気がする。

たしかに外はひどい風雨にみまわれているようだった。台風、ようやく参上か、と花子は独り言ちた。それにしてもやっと、一人の休日が過ぎせるのは幸せなことだった。

紅茶を入れてトーストを焼き、簡単に腹ごしらえをすると、花子は、気分によって変えられるように何冊かの本を、リビングのソファに持ってきて読み始めた。

昨夜、というより今朝の記憶はもちろんはつきりと残ってはいいたが、まさに行きずりのキスは余韻に浸るような代物ではなく、花子は比較的集中して、約一千年前のチャラ男を主人公にした物語に、紅茶をすすりながら読みふけることができた。少し飽きたらスマホをチェックした。

夕方頃になって、百合子からメッセージが来た。

〈昨日はお疲れ。あのあと、トモさんと二人でどこか行ったの？〉

まあ、普通はそう思うよね、と花子は思いながら、

〈昨日はありがとね！ いやいや、ちゃんと別れたよ(笑)〉

と返した。百合子は間髪入れずに

〈まじ？ 絶対やっつてると思ってた(笑) ショウ君もそう言ってたよ〉

〈さすがに、それは断った〉

〈やっぱ、誘われたんだ？〉

〈うん。でもあの人彼女いるし〉

〈らしいね。最低だね(笑)〉

花子はちよつと気になっていたことを、この際、勢いで聞いてしまおうと思った。

〈ゆりちゃんは、ショウさんと何かあるの？〉

しばらく百合子からの返信が途絶えたので、聞いてはいけないことを聞いたか、と思っていたら、十分後くらいに返答が来た。

〈うーん。最近よくあの店行くから、仲良くはしてるけど、そんな深入りはしてないよ〉

深入りしてない、という表現が若干含みを持たせている気もしたが、花子はそれ以上は詮索しないでおこうと思った。

〈そうだよね。なんか、ラーメン屋で仲良さそうだったから〉

〈あの人、面白いからね〉

〈しかもイケメンだしね。ていうか、そんなにあの店通ってて、旦那さん怒らない？ (笑)〉

百合子の返信がまた止まった。花子は、自分が送った文章が皮肉っぽくはなかったかと、ちよつと心配になった。百合子は既婚者で、子供はいなかった。例の店のすぐ近くに家があり、確かに通おうと思えば毎日でも通えるのだろうけど……。

また十分くらいして百合子から返信が来た。

〈大丈夫よ。旦那も帰ってくるの遅いし〉

〈そっか。良かった。それにしても、私の誕生日のせいで朝まで付き合わせてしまつてごめんなさい、って旦那さんに伝えておいてね〉

〈気にしなくていいのに！ 私も楽しかったし〉

百合子はそのあとに可愛い猫のキャラクターのスタンプを送ってきた。それを合図にするように二人のやりとりは、しばし中断、となった。

百合子は、花子の前に勤めていた会社での同僚だった。二人とも中途入社だったが、花子よりも少し先に入社していて、初めの頃、花子の隣の席で、色々と仕事を教えてくれたのが彼女だった。大手広告代理店の契約社員の営業事務の仕事だった。

入社初日、隣の席の百合子を見た時、花子はその華やかさに圧倒された。髪は綺麗に巻いてあり、薄桃色のカーディガンに白いフレアスカート、ピンヒールの靴に、艶やかなネイル。聞くところによると元グラウンドCAだったという。結婚を機に転職して、お気楽に事務をやつてまゝ、という感じで、とにかく明るく幸福そうだった。その印象は今も変わっていない。けれど、結婚五年目にして子供が出来ず、しかも、セックスストレスだという彼女の三十代も、なかなか見た目ほどには順風満帆とは言えないようだった。

夜になり、花子の母は小さなショートケーキを買って帰ってきた。

「一日遅れちゃったけど、お祝いしましょ」

そういえば、昨日はケーキも食べなかった。

「あんた、昨日はどこ行ってたのよ？」

「友達と飲んでそのままカラオケ行ってきた」

「ふ〜ん」

何だか意味ありげな「ふ〜ん」だったが、母親はそれ以上は聞いてこなかった。さすがに三十過ぎた娘の朝帰りにイチイチ目くじらを立てるわけにもいかないのだろう。

花子は「まあ、こんなふうに母と自分の誕生日を祝えるのもあと何回かも知れないし」と思い、小さなテーブルを囲んで母親と小さなケーキを食べた。

花子は昨晚の後ろめたさからか、いつもより母親に対して優しい態度をとっている気が

していたが、やはり、三十二歳の誕生日ウィークエンドの締めくくりとしては、わびしさが残った。

誰か驚くような人から誕生日おめでどうメッセージが来てないかと、SNSなど色々チェックしたが、例年になく少ないメッセージにちよつとがっかりした。しかし、そんな風にスマートフォンをいじっていたら、例のトモユキからメッセージが来た。

〈今日はゆつくり過ごせた？〉

〈うん、台風だし一日家でごろごろしてました〉

〈そかそか（笑）〉

〈うん。そういえば、ショウさんが、私達がやってるんじゃないか、って言っていたらしいです〉

〈知ってる、ショウから直接聞かれた〉

〈私もゆりちゃんに言われた（笑） さすがにそれはない、って言っときました〉

〈ふふん。でもいっぱいチューしたな〉

そして男はクマが投げキッスをしているイラストのスタンプを送ってくる。

〈いい誕生日になったな〉

〈自信満々ですね〉

〈あら、やだった？〉

〈やだったら、しないよ〉

妙にテンポよく進むやりとりだった。花子は何とはなしに、自分から

〈火曜日、大丈夫でした、予定なかったです〉

と送った。

〈ほーか、良かった。会えるの楽しみや〉

今度はクマが目をハートにしているスタンプを男はひよいと送ってくる。

〈楽しみで眠れん〉

〈私は明日会社だからもう寝ますよ〉

〈ほい、おやすみ〉

そういえば、この人はどんなスケジュールで仕事をしているのか、と花子はちょっと思ったが、気にせず眠ることにした。何だか妙に眠たかった。

翌日、いつものように満員電車で揺られ、家から四十五分くらいの場所にあるオフィスに着いて、社長と経理の女性に挨拶すると、「何だか疲れているね」と驚いたように花子は言われた。特に疲労がたまるような週末ではなかったもので、花子は自分でも驚いたが、トイレに行つて鏡を見ると、たしかに酷い顔をしていた。トモユキとの一件が、想像以上に衝撃だったのかな、と花子は思つて、ちよつと後ろ暗い気持ちになった。

花子の勤める会社は従業員百人程度のIT企業で、花子と社長と経理の五十代の女性以外の社員はシステムエンジニアで顧客のオフィスに常駐しているので、いつもは小さな事

務所に三人だけのこじんまりとした職場だった。

花子は総務や給与計算を担当していた。転職したのは二年前、前の彼氏と別れてすぐだった。たぶん、二十代の頃だったら、さすがにこの環境にはすぐ飽き飽きしてしまったと思われるが、今は余計なストレスもなく、快適とさえ言えた。

社長は五十代後半の無口な男性で、経理の女性もよく喋るほうではなかった。自然と花子も口数少なかった。ランチの時間になると一人で本を持って近くの喫茶店へ行き、ピラフやパスタを食べながら、きっかり一時間読書をして帰ってくる。そして黙々と仕事をして六時を過ぎたら帰宅する。この穏やかな日常に花子はそれなりに満足していた。

(そういえば、この会社に入ってからは男と寝てないな)

そう考えると、もう二年はご無沙汰ということになる。

(ちようどいいタイミングかもしれない)

花子は朝出勤して最初の仕事である会議室のテーブルを拭く、というルーティン作業をしながら考えた。

(あんまり長くしないしていると、ふさがっちゃうかもしれないもんね)

何事もない一日を終えて帰宅すると、花子はやはり妙な疲れを覚えて少し横になるつもりでベッドに入った。起きたら十時近くで母は帰宅していて、野菜炒めと生姜焼きの簡単な夕飯が用意されていた。

「なんだか、お疲れね」

と変な表情で母親に言われた花子は、それには答えず、病みあがりのような気分ではぼそぼそと夕飯を食べた。食べながらふと、

「私、箸ちゃんと持ってる？」

と、花子は母親に聞いた。

「さあ、別に変じやないけど、なんで？」

「箸がちやんと持てないと、結婚できないんだって」

母親はあまり興味なさそうに、味噌汁のおかわりを花子のために、テーブルに置いた。

「あんたはそれ以前の問題でしょう。彼氏もいないんだから」

花子の母は、その手の話には大体このようなオチを着けた。花子は、それに対し、別にどうでもいいけれど、私はそのうち結婚するけどね、と考えることが、今のところ心でとるスタンス、というかレジスタンスだった。

スマートフォンを見ると、トモユキから三つほどメッセージが来ていた。最初のは八時過ぎ、

〈明日何時にどこにする？〉

それから一時間後くらいに、

〈渋谷でいい？〉

と来ていて、不機嫌な顔をしたクマのスタンプと一緒に送られてきていた。

〈ごめんなさい。寝てました〉

花子は返したが、すぐには既読にならなかった。そのまますぐにまた眠りたかったので、

〈明日渋谷に六時半でいいですか？〉

と追加して送った。顔を洗ったり歯を磨いているうちに、トモユキから返信が来た。

〈OK〉

また投げキッスをしているクマ。花子は苦笑いしながら、

〈おやすみなさい〉

と返した。まだ、今なら逃げられるんだよな。とうっすらと思いながら。

しかし、翌日、きっかり六時半に、花子は渋谷に到着した。トモユキはバスが遅れている、とのことで、花子は待ち合わせのモヤイ像前で、スマートフォンをいじったり、渋谷東急の一階に入っている化粧品売り場のぞいたりして時間をつぶした。

五分ほど過ぎて男は現れた。相変らず、変な格好をしている、と花子は思った。けれども革ジャンではなくチェックのシャツを着ているだけ、一昨日のカラオケの時よりはましに見えた。

「花ちゃん、今日も可愛いね」

というのが、男の第一声だった。男の吐く息に微かな煙草の臭いが感じられた。

ピックを買いに行きたい、という彼の言葉に従い、国道246号線の歩道橋を渡って反対側にある楽器屋に向かった。大きくて古い歩道橋は大勢の人間が昇り降りしていて、いつものことだが地震のように揺れている。

「この歩道橋こわいよな」

男は言った。

「うん、でも、もう慣れた」

「慣れた？」

「だって小学校の時から渡ってるから。塾がこっちの方にあっただの」

「そうか、東京育ちはええな」

他愛無いが、何となく白々しい会話をしながら店に着き、花子が電子ピアノの値札などを見ている間に男はさっさと買い物を買ってすませ、二人は店を出ると、また歩道橋を渡って渋谷の駅側へと戻った。

「俺がよく行く店でいい？ ピザが美味しいよ」

「いいですよ。ピザ好きだから」

店は道玄坂をちょっと脇にそれた路地にある小さなカウンターバーだった。一昨日の店とは違い、古く年季が入った感じで外国のパブを思わせる雰囲気だった。

トモユキが奥側で花子が手前に座った。トモユキは座るとすぐに煙草を吸い始めた。常連客らしくトモユキはバーテンダーの若い男と気軽な感じに挨拶を交わし、「シヨウ昨日来

た？」などと聞いていた。

お酒とおつまみとピザなどを頼んでからも、トモユキはバーテンダーの男ともう一人の若い女の店員と会話をしていたので花子はちよつと手持無沙汰だった。

「ショウウさんの店どうですか？ 繁盛してますか？」

とバーテンがトモユキに聞いていた。

「そうやね、結構入ってるよ客。でもあれやな、ショウウ目当ての女客とそれに群がる男って感じやな」

百合子もその女客の一人ってことか、と花子は思った。

「ゆりちゃんて、君の友達は結婚してるのやる？」

と突然トモユキが話を花子に振ってきた。

「うん」

「あんな夜中まで店に入り浸ってて旦那怒らんの？」

「旦那さんも遅くなる人が多いから、そこは文句言わせないみたいです」

「はあ、なんや尻に敷いとるタイプか」

「旦那さんは、ゆりちゃんにべたばれですよ」

「へえ。仲ええ夫婦なんやな」

トモユキの奥側に若い女二人組の客が座った。トモユキが煙草に火をつける時、隣の女に「吸ってもいいですか？」と尋ねると、少し渋る様子を見せたので花子は「私と場所変わりますか」と言つて男と席を入れ替えた。トモユキは煙草を吸いながら、

「結婚したいと思う？」

と花子に尋ねた。

「うーん。まあ年が年なんでそろそろ思うようになりました」

「あ、そう。俺、全然したいと思わんのよ」

花子は特に答える言葉もないので、手元の箸置きをいじりながら、自分の手を見つめていた。トモユキも黙っていて、しかしそれは何か密度のある沈黙だった。

煙草を吸い終わると男は「店変えるか」と言つて、バーテンに会計を頼んだ。支払いが済みました。店を出るとトモユキは「ホテルに行こう」と言った。

「さつきからな、めっちゃ勃起しとるわ」

と言われて花子は苦笑した。

バーのすぐ裏手にあるラブホテルに入る。ラブホは学生の時以来なので、花子は妙に緊張していた。ホテルの狭い部屋に入ると、急に嫌悪感が込み上げてきたが、もう逃げることはできなかつた。

ホテルに入る前に寄つたコンビニエンスストアで買った酒を、小さなソファに座つて男は飲みだして、カラオケの時のように花子に口移しし、「抱いていいの？」と耳元で言ってきた。その不必要に芝居がかった台詞に、花子の気持ちはさらに萎えた。

それでもここまで来てしまったものは、という風に服を脱いで、男とともにシャワーを浴びに行くと、やたら寒く感じた。背中にアトピー性皮膚炎のかさぶた痕が沢山あるのを見られるのも嫌なことのひとつだった。やはりトモユキは気が付いて「これ、DV？」と聞いた。なぜ、そういう発想になるの、と思ったが「違うよ、アトピーなの」と花子は答えた。が、とにかくベッドに入って、男は下着を脱ぐと「大きいでしょ？」と勃起した性器を自慢してきた。花子はその言葉に滑稽さを覚えると同時に怖気づいて、何も答えないでいるうちに男は覆いかぶさってきて、すぐに挿入されそうになった。花子は慌てて「ゴムつけて」と言い、男は少し面倒くさそうにそれをつけて、セックスを始めた。「大きい」と言われたので痛いことを覚悟していたが、意識しているせいか、久しぶりのせいか、やはり快樂より不快の方が強かった。しかし、それでもいわゆる「喘ぎ声」だけは自然と自分の中から発せられることを花子は不思議に思った。

男は特に変な技巧に走るでもなく、体力の続く限り動いていたが、射精に至る前に疲れが来たのか、花子から離れて、花子の右側に寝そべった。そして「あく疲れた」と言いながら、煙草を吸い始めた。

「花ちゃん、これまで何人くらいとやった？」

トモユキの質問に、

「六人くらい」

と花子はほぼ正確な数字を答えた。

「ほう」

と男は言い、しばらく煙草を吹かしていたが、また唐突に、

「処女はええで」

と言ったので、今度は花子が「ほう」と答えた。

「俺の彼女今二十七やけど、俺が最初の男やから、二十五で付き合い始めた時、まだ処女やっつてん」

「二十五歳で処女だったの？」

花子はいささか驚いて言った。

「そう、箱入り娘やからな」

と男は少し不服そうに答えた。

(なんだ、お嬢か)

と花子は心の中で舌打ちをしたが、いずれにせよセックスしたばかりの相手にする話ではないだろうと考え、多分牽制されているのだろうな、と思うと、付き合うつもりもない男にわざわざそんなことを言われるのが腹立たしく感じられて、枕に顔を埋めて、不機嫌な受け答えをしていた。そんな花子の様子に気が付いたのか、男は、

「な〜によ〜」

と言いながらまた花子に抱き付いて、自然と性器のあたりに手を伸ばし、そこが濡れていた。それで「また、むらむらしてきたわ」と言い、再度挿入した。

今度はコンドームをつけなかったが花子は何も言わなかった。そうして男はしばらくすると射精に至り、終わるとさっさとシャワーを浴びに行ってしまった。花子も起き上がってシャワーを浴びに行ったが、今度もまた妙に寒かった。寒気はシャワーを浴びても収まらず、ベッドの上で服を着る時には花子は完全に震えていた。歯がガチガチと音を立て、花子は小学生の頃プールの時間によく同じような状態になったことを思い出した。それと、十九歳の時に初めて男と寝た時にも同じようなことがあった。

トモユキは花子の様子をさほど気にするでもなく、むしろ二時間の休憩時間の終了時刻の方が気にかかっているようだった。時刻はほぼびったりで、二人はそそくさと部屋を出ると、一階のロビーで会計をした。

花子は、ほとんど現金を持っていなかったが、支払いをしようとする男に、一応自分も金を出すような素振りを見せて財布を開け、今気が付いたかのように「あ、お金無かった」と言った。

男は「大丈夫よ」と言いながら支払いを済ませたが、

「帰りの電車賃はあんの？」

と聞いてきた。

「大丈夫、定期があるから」

と、花子は答えた。

駅に向かう道すがら、花子はずっと、歯をガチガチ鳴らして震えていた。男とは腕を組みながら歩いてきたが、この状況を万が一、知っている人に見られたらどうしよう、という気持ちも手伝って花子は終始うつむき加減だった。

地下鉄の降り口に着くと、男は別れのキスを要求した。花子はこんな明るい公衆の面前では嫌だ、と拒否したが、やりとりが長引くのも愚かしいので、簡単に唇を合せて「バイバイ」と言っただけで行った。去り際に男は、

「家着いたら連絡して」

と言った。花子は地下鉄の降り口の階段を駆けるようにして下りて行った。

家に着いたのは十一時を少し過ぎた頃で、花子の母親は飲み会にしては帰りが早いのでちよつと怪訝そうな顔をしていた。

花子はもうとっくに震えは収まっていたが、何か温かいものが飲みたくなくてミルクティを入れて飲んだ。スマホを見るとトモユキから「もう着いた？」とメッセージが来ていた。

〈着いたよ〉

と返すと、すぐに

〈おかえり〉

と返ってきた。言葉がおかしいな、と思いつつも

〈ただいま〉

と打ち返すと、目をハートの形にしているクマの絵が送られてきた。

〈今紅茶飲んだの〉

〈優雅やな〉

今度は花子が花にまみれた猫の絵を送った。

〈また遊ぼうな〉

と男は送ってきて

〈今度はゆっくりにお茶でもしましょう〉

と花子は当り障りなく返した。それからしばらくやりとりをした後に、男は寝る前のキスを要求してきたので、花子も投げキッスをしているクマを送り付けた。そして、とろとろと眠りについた。花子は完全に疲れていた。

百合子から誘いがあった、花子が再びショウの店「ヴェリテ」に行ったのは、トモユキと寝てから一週間ほどたってからだだった。

平日の夜だが、まだ七時台と早い時間だったので、客は百合子と花子しかいなかった。現在は知人の会社で定時上がりの事務員をしている百合子は先に店に着いていて、花子が入っていくと、ショウとともに花子を見て意味ありげに笑いながら「花ちゃん、待ってたよ」と言った。

「いらつしやい」

とショウはまるで常連にでもいうように言った。花子は何事もないような素振り、メニューをみてアルコール度数の低いカクテルを頼んだ。

「花ちゃん、元気してた？」

と数日前に会ったばかりなのに百合子は聞いた。

「うん、元気だよ」

「なんかやつれてない？」

と百合子の言葉は心配気だが、顔は笑っていた。花子は、何か浮かれた関係の中に巻き込まれた感じがしたが、面倒なので「そんなことないよ」とはぐらかした。

実際のところ、トモユキと関係を持つてからというもの、花子は様々な物思いに悩まされていた。その物思いは複数の要素が混ざり合ったもので、それぞれの要素がその時々にもっとも重要なもののように思われて花子を悩ませ、それが順番に彼女の心を巡って、仕事でも帰宅中も友達とご飯を食べているときも、何となく上の空にさせていた。

だいたいそれは、大きく三つの種類に分けることができ、一つ目が、トモユキは金目当てなんじゃないか、という不安、二つ目が、トモユキに彼女がいる、という事実、三つ目が、そもそも三十を過ぎてこんな馬鹿げた男関係を持つてしまったことへの後悔の念、だった。さすがに、トモユキに恋心を抱いているとは自分でも思えなかったが、花子にとっては悩ましい要素の集合体に、千々に心を乱されている状況だった。

この三つの中で、恐らく一番引っかけているのが「金」だった。トモユキは知り合っで一週間程度で、情報もほとんどないが、それでもちゃんと働いている空気がまるでない、と

いうことくらいは花子も勘付いていた。しかしそれでいて、金に困っている様子がないのが、正直言って怪しいところだった。飲み歩いているし、ホテル代も払ってくれた。ちらりと目に入った腕時計はロレックスだった。服やアクセサリーなど身に着けているものも安価なものではなさそうだ。ただし、羽振りがよい感じも受けなかった。ラブホテルの部屋は一番安い部屋を選んでいたし、そういえば最初に行ったカラオケも多く支払いをする、というような姿勢は見せなかった。かと言って、何かアルバイトをしながら、売れる日を待っている、というような泥臭い感じは全くない。考えれば考えるほど謎が深まる気がしたが、花子の現時点での情報を総合して得られる答えは、女に貢いでもらっている男、という結論くらいだった。

だとすると、自分が新しい標的になっているのでは、という不安が花子が無意味に苛んだ。もしそうだとしたら、そもそもそんな危険な男とはさっさと縁を切れればいいのだが、手取り給与は普通のOL程度ではあるが、密かに借金を抱える花子にとって、金を狙われる、というのは何か急所を突かれるような不安をあおるものだった。

数度の転職で、年収が大幅に下がった時期に、友達の結婚式などで出費が重なった結果できた借金で、学生時代に借りていた奨学金の返済も終わっていなかった。完済まで数年かかっていた。花子は当然それを誰にも隠していたが、そのせいか、金が無いように思われることは一種の恐怖になっていた。勿論、男に貢ぐ金なんかはないし、もし借金が無かったとしても、そんなことは御免だが、借金があることを知られたくない余りに、多少の金だったら工面してしまいそうな奇妙な精神状態に、花子はなっていた。

トモユキからは毎日連絡が来て、一日、二時間くらいラインでやりとりをしていた。他愛無いことや、きわどい内容が多かったが、花子はなぜかうまいこと断ち切ることができず、つれづれの時間をトモユキのために費やしていた。

「で、その後トモさんとはどうなったの？」

花子の頼んだカクテルが出てきて、小さく乾杯をしたあと、百合子は少し酔いも手伝ったような興味津々の態で聞いてきた。花子は何か面倒なものを感じていたので

「何もないよ」

と嘘をついた。

「ふーん」

という百合子の声にショウウの声が重なっていた。見ると、ショウウは案外真面目な顔で、花子をじっと見据えていた。

「はなちゃん、嘘はいけないよ」

少しふざけたような口調だが、視線は変わらず真っ直ぐに花子を刺していた。

(この人はひょっとしたら、あいつから話を聞いているのかもしれない)

と花子は思ったが、相手がその確実な証拠を見せてくるまでは、やはり隠しておこうと思っ
って、しらを切りとおした。

「何もないですよ」

「へえ」

と、シヨウの鋭い視線はやっとゆるみ、拍子抜けしたような表情になった。

「連絡はくるけど」

「どれくらい？」

だんだん酔っぱらってきた百合子が花子の顔を覗き込むようにして言った。

「毎日」

「毎日！」

百合子は花子の肩に手をかけて

「らぶらぶじゃん！」

と楽しそうに言った。

「らぶらぶじゃん」

と、シヨウは眉ひとつ動かすことなく言った。

「まさか」

花子はそう言って、グラスを手を取って一口酒を飲んだ。

「あの人、彼女いるじゃないですか」

「うん」

シヨウは、短く言って口をへの字に曲げた。ふざけた表情をしていても、目だけはいつも笑わずに、どこか冷静に周囲を観察しているようなところがあつたが、それは職業柄なのだろう、と花子は思った。

「あの人、何者なんですか？」

花子は聞きたかつた質問をシヨウに投げかけた。

「××のお抱えミュージシャンだよ」

と彼は、大手のレコード会社の名前を挙げた。何だか凄い感じもするが、随分ぼんやりとしているような気もする。花子がいまいち腑に落ちない表情をしているのを見て取って、

「〇〇とか知らない？ あの子達のギターとか担当してる」

と、聞いたことのあるくらいのアイドルグループの名前を出してきた。

「へえ、じゃあ結構売れてるんですね？ そんなに仕事してないのかと思ってた」

「まあねえ」

シヨウは少し表情を変え、一瞬ためらうような様子を見せたが、それは本当に瞬時のことで、もう少し酔っていたら花子も気がつかなかっただろうと思われた。

「仲良い奴で、そいつらの仕事を今結構やってる人がいるから、そこから仕事もらってるんだけど、事務所やめてるから今はそれほどがっつり仕事してるわけではないけどね。まあでも、ギターはうまいよ」

そう言った時のシヨウは嘘っぽい表情ではなかった。

「そうでなかったら、仲良くしないよ、あんなやつ」

そう言って、彼は店に入ってきた新しい客の前に移動していった。

「なんかねえ、お金持ちのお坊ちゃんらしいよ」

百合子はもう殆ど泥酔の態で、上半身をなかば花子に持たせかけていたが、会話はしつかり聞いていたらしく、ショウウが去ったタイミングで花子に耳打ちをしてきた。

「トモさんて。資産家の息子、なんだって」

花子はそれを聞いて、謎が解けたような納得感とともに、一週間頭を悩ませた例の要素のうち一つが霧消した気がして、一瞬ふっと力が抜けた。

「そうなんだ、言われてみれば、金持ちのドラ息子って感じがするよ」

「でしょう？ 相当親に迷惑かけてきたみたいよ」

「一人っ子だから甘やかされたんだね」

「あの人、一人っ子なの？」

「そうらしいよ」

ほおぐつと言うものの、その実、百合子は余り興味もなさそうで、ショウウの方をちらちら見ていた。そういえば、この二人の関係はどうなってるんだろう、と花子は思い、

「ねえ、ショウさんと店の外で会ったりするの？」

と百合子に尋ねた。

「うーん。まあねえ。まあ、その話はあとでゆっくりする」

百合子は首を変な風に傾げて笑って見せた。

「旦那がねえ」

と百合子は酒を飲みながら言う。

「この前ついに結婚記念日忘れたの」

「え、ほんとに？」

「うん。セックスストレスの上に、結婚記念日忘れるなんて最低じゃない？」

「まあねえ」

花子は横目で百合子を見た。最初に出会ったときのようなピンク色のふりふりした服装はさすがにもうしていないが、白いワンピースにレモンイエローのカーデイガンを羽織り、男性受けの良さそうな清楚な雰囲気は、今も十分に魅力的だ。百合子の夫を花子は知っていたが、銀行勤めの程よく愛想の良い真面目な感じの男性で、決して彼女をないがしろにして記念日を忘れたわけではないと思われる。

百合子はとても楽しそうにショウウを見ていた。よく観察していると、ショウウも時折百合子を見て意味ありげな視線を交わしている。ああ、そういうことね、と花子は思っ、また少し疲れを感じた。

夜も更けてきて客が増え始め、百合子と一緒に、他の常連客と話したりして時間は過ぎた。今日はトモユキは店には来ないようだった。花子は終電で帰った。少し酔っぱらっていた。

早朝五時にトモユキから電話が来て、花子は起きた。

「はなたくん。セックスしよ」

と甘えた声で言ってくる。花子は伸びをしながら

「何言ってるの、酔ってるの？」

「ちよいと酔ったわ。ねえ。エッチしよ」

「分かった分かった、今度ね」

そんな無意味なやりとりが続き、トモユキは一緒に飲んでいた友達が酔っぱらってさらした醜態についてなど話して、

「またかけるわ。浮気すんなよ」

と言って電話を切った。

(浮気しているのはお前だろう)

と思うが、なぜか電話を切った後は笑ってしまう。

花子はもともと多いのが最近ではさらに思い出し笑いが増え、それと、スマホを見る回数も増えた。事務所に誰もいないときは、十五分に一回は鞆の中をチェックした。昼間や夕方のおかしな時間にトモユキから連絡が来ていることも多々あった。よほど暇なんだろうな、と花子は思った。

第一の物思いが消えると、散々花子を悩ました感情は不思議なほど消えていた。トモユキの彼女についての不安は、浮気がばれて面倒なことに巻き込まれないか、というものだったが、トモユキの浮気が自分だけでないことは明らかだし、それをわざわざ気にするほどのこともない、と思った。

第三の不安は、自ら友達に「彼女のいる自称ギタリストとやってしまった」と言ってることで、自虐ネタとしてごまかしてしまった。友人たちは、これまでも男運の無かった花子が三十を過ぎてついに、聞いたこともないような怪しい男に引っかかっている状況に、最初は笑いこけていたが、だんだんと真剣に説教などをしてくるようになった。

花子は、それを真摯に受け止めるような表情はしていた。そりや、私だって真剣にトモユキみたいな人を好きな訳ではない。そのうち、優しい真面目な男の人が出てきたら、結婚を考えられる人が出てきたら、いいな、とは思っているよ。しかし、それにはまず借金を返さなくてはいけない。花子は、分割の返済が終わるまでが一つの山だと思って、買い物をはかっていた。トモユキから頻繁に誘われるのも断った。金が、男の誘惑を断ち切る一つのバリアになっていることを花子は奇妙に有難いと思った。もし金に困っていなかったら、花子は喜んでトモユキに会いに行きただろう。

トモユキは、絶対に自分の家に花子を呼ばなかった。ということはトモユキと会うことは外食代とホテル代がかかる、ということだ。金なら男に出させておけばいい、というのは大方の友達の見解だったが、借金がある、という意識が花子に一種の後ろめたさを与えて、恥をさけるように、男ばかりに金を出させるわけにいかない、という依怙地な気持ちにもなっていた。

トモユキと出会って一ヶ月ほどたったある日、花子は、会社に四、五人ほどしかいない女性社員との「女子会」に参加した。

小さい子供がいる人もいたので、終了時間は十時と飲み会にしては早かった。二次会の話もせず、女性たちは早々に解散した。皆、それぞれの路線へとばらばらに向かっていったが、その中で最も若い二十五、六歳の女子社員と花子は途中まで一緒になった。横断歩道で信号が赤になり、立ち止まっているとき、彼女がおもむろに、

「私、溝口さんに言っておかないといけないことがあるんです」

と言ってきた。花子が彼女を直視すると、彼女は明らかに切り出すのをためらうように「えーっと、あのお」

とか言いながら、逡巡し始めた。

(まるで告白するときみたいだな)

と花子は内心で思った。

「私、Aさんと結婚するんです」

彼女はようやく、その「切り出しにくいこと」を必死で吐き出すような感じで言った。花子は、だいたい分かっていたことだったので、全く驚いた様子はせず、むしろ彼女を気遣うつもりで

「うん、そうなんだ、それはおめでとうございます」

と言った。

それは、だいたい、分かっていたことだった。二人の結婚は社内でも噂になっていたし、むしろ、そんなことはとくに花子の心の中で整理をつけていた。しかも、そういう動きを頼みもしないのに、花子に匂わせるように行動してきたのは、彼女自身だった。が、花子はかなり年下の彼女にひがみを持ち続けるほど自分は子供ではない、と自身にいいきかせることで精神の安定を得ていたので、全く冷静にその時を迎えることができた。

こちらのてらいのない祝福の言葉を聞いて、彼女も安心したように嬉しそうな笑顔を見せた。それから、結婚に伴う社内での必要な事務手続き、提出が必要な書類などについて簡単に説明し、結婚式のことなどありがちな会話に終始した。彼女は結婚式は家族だけで行うので、上長や社長も呼ぶことはないと言った。そうして花子達はおたがいに気持ちよく別れていった。

彼女の結婚相手であるAと、花子との間には何もなかった。ただ、一方的に花子がAは自分を好きなのではないか、と勘違いしていただけだった。が、この彼氏のいない二年間に、自分を気恥ずかしそうに見つめるAの感情に、花子はすこしずつ、揺り動かされるようになっていた。花子は傲慢にも、Aが奥手すぎて自分にアプローチできないのだ、と思い込んでいた。妙に照れたように挙動不審に自分に接してくるAに対し、これまでの経験から、何か特別な情念を勝手に感じ取っていた。

だが、Aと彼女Bとが、やたら親しいことにも気が付いていた。BはAの部下で部署も同じだった。それでも二人には、十五歳近い年の差があった。だから、恋愛に発展するとは思

っていなかった。というか思わないようにしていた。花子は、Aの学歴を調べ、割と高学歴なのを知った。社内の評判も悪くない、Aなら恋愛対象になるな、と妙に上からな考え方だったけれど、花子は確実にAを意識するようになっていた。奥手なAをどう自分にむかかって動かすか、それを考え始めていた。

そんな矢先、さすがの花子も何となく気になることが起きた。まずAが引越しをした。総務担当なので、申請を受けるのは花子だった。それを知って、何か心がざわめくものがあった。たいてい、結婚する社員はその少し前に引越しをするのだ。

そして、しばらくたって、花子が全社に向けて送っていたアンケートメールの返信が、AとBと殆ど五分ほどの差で来ているのに気が付いた。しかも夜十二時近くだった。偶然だろう、と思うことにしたが、もし、BがAの家に泊まっていて、Aが送ってからBも送ったのだとしたら、それはあり得ることだった。しかも、もしそれが本当ならおそらくBは花子がそれに気が付くだろうという前提で送ってきたのだろうと思った。だとすると、Bはなかなか恐ろしい女だ、と思われた。

そして極め付けの日はやってきた。花子の会社は毎年沖縄に社員旅行に行くのだが、その旅行の準備委員に花子も入っていて、当日の宴会の内容などを考える会議に出席した。なぜかそこにはAとBもいた。会議自体は十名ほどの参加だったが、AとBは隣り合っていてかなり近くに座っていた。さらに、椅子に座る前に、狭い通路に立っていたとき、AはBの後ろを通ろうとして、Bに脇に避けてほしい、というのを示すために彼女の肩に手のひらをそっと乗せたのだった。Bは何の反応も示さず、彼に触れるのは当然のことのようにそっと身を片側によせた。それを見た時に花子は、これまで心の中で曖昧にしてきたものが、確実になった、と感じた。

まさに確証だった。ただの部下と上司でこの接触が成り立つわけがなかった。もし自分が上司にあんな風に肩に触られたら、まず確実に体が条件反射で震えるだろうし、そもそもセクハラになりかねない。あの二人が、あのボディタッチを当たり前のように行えるのは、体を触れ合うのが当然の仲だからだ。花子はそれまでの自分のヨミ間違いを激しく後悔し、また恥ずかしいと思った。

花子の内心の動揺はかなり大きいものだったが、それを外面に出すことは勿論絶対にありえないことだった。そもそもが自分の誤解であり、二人には一切非はないのだから。花子は必死に悔しさや羞恥心を抑えつけようとして、二人が結婚式を挙げる夢などを色々見たりした。何の予定もない夏の三連休に、呆然としながらひたすら歌番組を見て、心を静めていた。

だがその連休中、今度は例の二年前に別れた元彼が結婚したことをSNSで知ったのだ。泣きつ面に蜂、とはこのことだった。お盆休みには一人で瀬戸内海の島に旅行に行つて自然や芸術作品の中で気を紛らそうと努力したりした。そうこうしているうちに、そもそも彼女の妄想の中で起きたことなので、大きく膨らんだ風船の爆発の衝撃は大きかったものの、何も残らずただ時間だけが虚しく過ぎた、というつまらない結果だけを得て、花子

の日々はまた風のような状態にもどりつつあった……。

そんな時期にトモユキに出会ったのだった。

だからトモユキとの出会いは、全く無駄なものではなかった、と花子は思っていた。

AとBへの誰にも分かち合うことのできない複雑な嫉妬の嵐はすぎたが、そのあとは会社の数少ない女性社員が自分以外、全員既婚者になった、という事実が彼女の心を曇らしていた。それだけならまだしも、恋人すらない状態で「女子会」などに参加すると、さすがの彼女もかなり詰まらない気持ちになった。広告業界から生真面目なIT業界に来て、それまでの華やかさを引きずっている彼女は、女性社員たちにも「きれいですね」とか「もてますよね」とかいつて持ち上げられてはいたが、実際は誰よりも下にいた。女子会で新しく人妻になった女子社員が夫との家庭生活の悩みと言う名目のろけを嬉しそうに語り、それに既婚者の先輩たちがアドバイスする、という会話を花子もプライドがあるので笑顔で聞きながら聞きながらも、心中は悲惨なまでに〈蚊帳の外〉である、という感じがしていた。花子は大抵そういうとき、最終的にひどい頭痛に悩まされながら帰宅するのだった。だが、トモユキの存在を得てからは、花子は男がいることを匂わせることができたし、それだけでもずいぶん心は軽くなっていた。

だからこの日も花子は、もやもやした感情をかき消すために、帰りの電車の中でトモユキにメッセージを送った。

〈なにしてるの？〉

返事はすぐに来た。

〈いま、ヴェリテにおるで〉

電車はまさに三軒茶屋駅に着いたところだった。花子は衝動的に電車を降りた。

〈私もいま三茶ついた。お店いこうかな？〉

〈おいで〉

店に着くと、今日も百合子が店にいた。トモユキの隣に座っていたのを、ショウウが気を回して百合子に席をずらすように言い、花子はトモユキの隣に座るよう促された。花子は店に着いたとたん、一日の疲れをどっと感じて、バッグを音を立ててカウンターに置き、どかかと椅子に座り込んだ。

「なんか、甘いお酒ください」

「はいよ」

「花ちゃん、お疲れ。今帰りだったの？」

「うん。会社の人たちと飲み会だったの」

百合子はなんだかにやにやしながら花子に身を寄せてきた。そして花子に耳打ちをした。「トモさんね、彼女と別れたんだったって！」

耳打ちといえども、その声は店中にきこえていた。花子は驚いてトモユキを見た。

「そうなの？」

「ああ、喧嘩別れや」

「喧嘩？」

「あいつうるさいねん。昼間っからずっと、五分おきに電話してきよる。それでぶちぎれて、もう電話でとらん」

「なんだ、それでは本当に別れたかどうかは怪しいな、と花子は思った。

ショウの作ったカクテルを飲みながら、花子はしばらく、百合子に今日起こった出来事のあらましを話していた。若い女子社員に結婚の報告をされたこと、自分が会社で唯一の未婚女性になったこと……。しかし百合子は頻繁に相槌を打つものの、どうやら全く話を聞いてなさそうだった。彼女の意識は常にショウに向いているようで、ショウは別の若い女の客と楽しそうに会話をしていた。

するとトモキが席を立った。何か目くばせされた気がしたが、よくわからずにいると、腰に触られたので合図だったのだ、と気が付いた。それで二人は店の外にでた。トモキは苛々した調子で花子にキスし始めた。そして耳元で

「今日、身体貸して」

としゃあしやあと人を小馬鹿にしたせりふをはいた。しかし、花子も気分がくさくさしていたので、「いいよ」と答えた。

店に戻ると、いつの間に加わっていた長髪の若い男の客が大きな声で

「今日、ハプニングバーに彼女と行ってきた」

と話していた。

「ハプニングバーてなに？」

と百合子が聞く。

「乱交する店」

ショウが簡潔にこたえる。

「えーやだ。きもい」

「俺は、そんなとこはいかん」

なぜか突然トモキが口を挟んだ。

「不潔やからな」

こんなところで無駄にお坊ちゃん風を気取るのか、と花子はおかしく思った。

十二時を回った頃、トモキは会計をした。ショウが花子の飲み分をトモキにつけていたので、花子は一銭も払わずにすんだ。二人はショウや百合子の冷かしの背に店を出て、一緒にタクシーに乗り込んだ。行き先は当然、渋谷の道玄坂だった。

車の中で、トモキは先ほどの会計のレシートを見ながら、

「ショウのやつ、絶対ぼったくりや」

と悪態をついた。

「ぼったくり？」

「俺こんなに酒飲んでないやろ。むちゃくちゃやで」

一万円の会計だった。それが本当に、ぼったくりかどうかは花子には分からなかった。

「はなちゃん、俺ホテル代だから、タクシー代だして」
「うん」

まあ、それなら損はしないか、と思い、花子は承諾した。
道玄坂でタクシーを降りると、トモユキは花子の肩に手を回し肩を組むようにして二人は、夜のラブホテル街を徘徊した。

最初に入ったホテルで、宿泊料を確認すると、
「ここはたけえな」

とトモユキは言って、入らずにでた。

そういう風に何軒か回って、ようやく、金銭的に折り合いをつけたようで、外装も内装も古ぼけた感じのラブホテルに入った。その時点でだいぶ、花子の気持ちは萎えていたが、極めつけにトモユキは先払いの窓口で、
「おばちゃん、高いわ。おまけて」

と値下げ交渉をはじめた。そんなことをする人間を見るのは初めてなので、花子は幻滅を
通り越して呆れていた。

ずっと黙っている花子にトモユキは少し気まずいものを感じたのか、

「もう貯金がこれだけしかあらへん」

と行って銀行の残高明細を見せてきた。そこには五百万円と残高の記載があった。

(え、自慢?)

と花子は思ったが、口には出さなかった。自分には借金こそあれ、貯金はない。それは大きな差だった。

セックスの後、腕枕をしながら、トモユキは花子に「俺とつきあう?」と言った。花子は、それは無理だろう、と思いつつながら

「おうちに連れて行ってくれたらいいよ」

と答えた。

「俺んちな。そのうちな。まだ元カノの荷物とかたくさんあるから、時間かかるかもな」

「荷物なんて送っちゃえばいいじゃない」

「いやーそんなわけにもいかんやろ。色んなものがあるしな」

「ふーん」

トモユキは腕枕の体勢のまま煙草を吸い始めた。

「そういえば、元カノって仕事は何してるの?」

「洋服屋で働きながら、歌手目指しとる」

「へえ」

「あいつもなあ、俺と別れてリスカとかせんか、心配やなあ」

「え?」

「俺今まで付き合ってきた女に五人くらい腕切られてんのよ」

花子はそのことをさりとて言うトモユキに、だいぶ慣れてはきたものの驚いて男の顔を見た。

「一人には目の前で切られたからな。あれはきつかった」

無言でいる花子にトモユキは抱き付いて

「はなたくん、みたいな感じで女の子に甘えるからやろなあ。依存されるんやな。メンヘラが多いのよ」

「はあ」

トモユキの話す事は花子には余りにリアリティがなさ過ぎて、別世界のことのように思われた。現実には男の身体はすぐ傍に存在しているけれど、同じ現実世界の住人のような気がしなかった。でもそれで、自分は他の女達のようにこの男に依存しないですんでいるのかもしれないな、と花子はぼんやり思った。

昼にラブホテルを出て寿司屋でランチを食べ、花子とトモユキはバスに乗って帰宅した。花子の方が電車への乗り換えのために、先にバスを降りた。さすがにバスの中ではトモユキは別れのキスを要求しなかった。バスを降りて歩道に立った花子は、車内に残ったトモユキを振り返って見た。車道側の窓辺に座るトモユキは、さきほどまで隣にいた花子のことなど忘れたように、例の疲れをおびた表情で頬杖をついて反対側の窓の外を見ていた。花子はその姿を見て少し笑い、駅へと向かった。

*

帰宅すると、母親がちやうど外出するところだった。

「あんた、彼氏でもできたの？」

朝帰りの娘に母が聞く。

「いや」

「ぶ〜ん」

そう言っ母は玄関を出ていった。

そういえば、あの人は私が結婚したらどうするのだろう、と花子は思った。母の母親、つまり花子の祖母は一人で公営住宅に住んでいた。公営住宅は借り主が死んだらそれで契約は終わる。だから、母には「家」がないのだ。貯金はないだろうし、母は一人っ子だから頼る兄弟もない。そう考えると、いままで直視することを避けていた事実が見えてくる。母親は私の足かせなのだ。

母が家を出て十年ほどして離婚した花子の父親は、数年前に定年を迎え、山梨の実家に隠居してしまった。弟はインターネットで出会った沖繩に住む女の子と結婚し、彼女の実家の事実上の婿養子のような形になり、沖繩に行つて妻の実家の近くにアパートを借りて、二人の子供と暮らしている。父や弟との仲は、花子自身は悪くなかったが、母親は父親と接点を持つことはなかったし、花子は事実上、祖母をのぞけば、母親のこの世に唯一の頼れる親族

だった。

その逆もまたしかりなのだが、花子はまだ結婚して姻族ができれば、母親からは離れて新しい家族に入っていく身だった。まず、この家を出たら、母の稼ぎだけで、十萬円の賃料を払っていくことはできないだろう。かといって、一人で生活していくだけの給与をもらってはいないわけではないはずだった。だが、いまだに数年に一度いく海外旅行や年に一度くらいは買うブランド品のせいで、貯蓄ゼロなのだろうから、一人になったら下流老人は必至だった。

ほとんど仕事をせずに遊び暮らしている放蕩息子の子トモユキを馬鹿にできない自分を花子は感じていた。トモユキには金がある。帰る家もある。私にはないのだ。ただ、この身ひとつで世を渡るか、身請けしてくれる男を探すしかない。そして、まだ身請けの希望は捨てていなかった。三十二歳、まだバーで怪しい男にナンパされるくらいの容色はあるはずだ……。しかし、それは果たしてアドバンテージなのか？

百合子が、ロースクールに行っている男友達の、同級生だという男の子が彼女募集中らしいので会ってみる？　と言ってきたのは、そんな調子で年末を迎えようとしている頃だった。

トモユキからは相変わらずしれっと連絡が来ていた。でも家に呼ぶわけでもない。どうせ彼女とは復縁したんだろう、と花子も了解はしていた。

百合子は年末も押し迫った頃に、顔合わせの日をセッティングした。百合子と男友達と、今回紹介される男の子と花子とで、ご飯を食べる約束だった。

百合子の男友達というのは、前職の広告代理店で一緒に働いていた元同僚で、花子も名前と顔だけは知っていた。退職して、父親の事務所を継ぐためにロースクールに入り直し司法試験を目指しているようだ。紹介される男の子は、社会人経験はなく大学卒業後そのままローに進学したらしいので、花子からしたら、かなり年下だった。

「でもさ、彼が来年司法試験に合格したら弁護士夫人になれるかもしれないんだよ？　よくない？」

というのが百合子のごり押し言葉だった。

花子とはとにかくそろそろトモユキの呪縛から逃れたいと考えていたので、紹介の話は全てありがたく受け入れる心意気になっていた。

顔合わせはお茶の水駅付近のカフェにてランチタイムに行われた。

ひさしぶりに会った元同僚の男も常日頃学生に混ざっているからか、ずいぶん若く見えたし、紹介された男の子は背が高くさわやかな感じの良い青年だった。話の内容も面白く、当然ながら知的であり、花子にとっては申し分ない相手、といえた。

ひととおり盛り上がったランチの後、元同僚と百合子は先に帰ってしまい、若者と花子は二人きりになった。

「どうします？　別の店でコーヒーでも飲みます？」

と若者が言い、彼について行く形で店を出た。

昔ながらのレトロな喫茶店に入り、コーヒーを飲みながら話してみると、彼は読書家で、美術館に行くのも好きだ、ということだった。年上の女性が好きで、同年代に全く興味もてない、とさらっと話す青年に、花子は、ずいぶん話しやすい子だな、と好感をおぼえた。そしてもっとも好感をもったのは、元々は弁護士ではなく教師になりたかった、という一言だった。しかし、父親が弁護士で実家が事務所なので姉と妹しかいない自分が継ぐしかなく、仕方なく弁護士を目指したのだと、彼は言った。

（やはり恵まれた環境で育った人なのだな）

と花子は思ったが、それゆえに自分の意思を変えなければいけない生き方、というのも可哀想な気がして、その可哀想なところが花子の心を少し揺らした。

その日は夜に忘年会の予定があったので、それまでの時間、花子は彼と喫茶店で過ごしてから別れた。別れた後もメッセージのやりとりが続き、何となく久しぶりに温かい感情を覚えていた。

数日前のクリスマスが最低だったので、花子は特に恋人の必要性を感じ始めていた。

クリスマスイブもクリスマス当日も平日だったし、年末の仕事が多忙を極める時期なので、花子は浮かれた街を尻目に仕事に追われている風を出すことができたが、さすがに夜に予定が無いのも悲しすぎる話だった。

するとまた百合子から、ヴェリテで常連の女性客たちがクリスマスパーティーをする、というので、花子も呼ばれたのだった。その頃には、常連の女客たちが、ほとんどショウのお手つきだ、ということは百合子の話で花子も知っていた。昔からのセックスフレンドを客として呼んだり、新しく店にきはじめた女を次々食っている、というのを百合子に愚痴られたとき花子は、百合子もショウとそういう関係なのか、とはつきりと聞くことはできなかった。けれどもそれは聞く方が野暮、というものだった。百合子がショウに入れあげているのは明らかだったし、他の女に手を出しているのなら、ショウが百合子にも手を出していないはずがなかった。

クリスマス当日、その数日前からばかりとトモユキからは連絡が途絶え、いよいよ縁も切れたか、と花子がほっとしつつ、なんだか癩に障るような気持ちでいた時、トモユキからハタとメッセージがきた。

〈メリークリトリス〉

花子はとっさに〈死ね〉と返信し、しばらくトモユキをブロックして彼からのメッセージは全く見ないように試みた。

そんな苛々を抱えてヴェリテに向かうと、着飾った三十代女性たちがカウンターを埋めていた。なぜみな、普通に婚活して結婚しないで、こんな明らかなクズ男につかまっているのか、花子には不思議でならなかった。彼女たちは皆それなりに美人で、職業もナースや保育士、ウエディングプランナーやデザイナーだとか、男受けの良さそうな仕事をしている子が多かった。それぞれ異性との出会いは少ないのかもしれないが、それにしても、こんな時

にこんなところでたむろしている必要性は全くないように思われた。女たちは一様にショウに見とれ、彼との会話を踊らされていた。確かに、このショウという男は、とても綺麗な顔をしていて、話術にたけていて、一対一で話しているのは自分でさえも楽しい、と思うことがある。けれども、わかりやすく近づいたら危険な匂いをする男じゃないか。これだったら、初めから行動も外見も破天荒で支離滅裂なトモユキの方が、こちらが、のめりこみそうにもない、という点で安全。パイなのではないか。それでも他の子たちはどうだか知らないけれど、百合子は一応既婚者だし、本当にショウに惚れ込んでいて彼とどうにか知りたい、と思っているわけではないのだから、まだ大丈夫だろう、とぎりぎりのところで花子は友人の身の上について勝手に安堵していた。

そんなこんなで今年も微妙なクリスマス夜の夜を過ごし、年末に突入していた。花子は自分の馬鹿げた無意味な祭りのような三十代の日々がいい加減、うんざりしていた。

百合子に紹介された若者は、ナオキ君、といった。まだ若い、かなり優秀らしいし、来年司法試験に一発合格してくれたら、もしかしたら弁護士夫人になれるかも。それはなかなか良い響きだな。

花子は、そんな妄想をたくましくしながら、一人、家路をたどった。

年明け、冬休みが終わる前に、花子はナオキ君と初詣デートに行った。その後、焼き肉を食べて、公園を散歩し、若い男はその勢いで花子にキスをした。花子は、楽しくはあったものの、キスをしてさほど感情が盛り上がり上がらないことに、何か釈然としないものを感じながら、名残惜しそうな彼を尻目に帰宅の途についた。

何となく、彼とのキスは、甥っ子とするキスのようで、色気を帯びたものを感じられないのだった。それでも、まだ出会って二回目だし、これからどんどん好きになっていけばいい、とありがちな女友達のアドバイスのような言葉を自分に言い聞かせながら夜道を歩いていくと、トモユキから電話がかかってきた。

「はなたくん。どこにいるの？」

「今デート帰り」

酔いも手伝って花子はストレートに答えた。

「デート？ 誰とよ」

「ゆりちゃんに紹介してもらった、若い子。いまロースクールに行っていて、今年司法試験に受かったら、弁護士になるんだよ」

花子の声が弾んでいるので、トモユキは少し癪にさわったらしく

「へえそうなん？ セックスしてないでしょうね」

「まだ紹介されたばかりでするわけないでしょ。あ、でもキスはしたよ」

「キス？ キスしたん？」

トモユキの声音が急に変わった。

「何キスしてんのよ。本当にやってないでしょうね？」

「だからやってないって。だから今帰ってるんでしょ」

「もう、はなたん、すぐキスする。わしが抱く」

「はい？」

「くやしいから、いまから抱きに行く」

「いや、今日は無理だよ。もう家つくし」

「じゃあ、来週抱く」

子供のように独占欲を全面に押し出してくるトモユキに花子はあきれた。かといって、その「来週」にはもうそんな発言をしたことすら忘れていたのも分かっていたので、花子は

「はいはい、じゃあもう家つくから切るね」

と電話を切った。

家に着くと、母親はまだ起きていて、正月の特番をテレビで見っていた。

「どこに行つてたの？ デート？」

と最近では平気でプライバシーを侵害してくるのが業腹だが、花子は気持ちが高揚していたので

「そうだよ」

とこれまたストレートに返答した。

「誰と？」

トモユキと同じ質問に花子は心の中で苦笑しながら

「ゆりちゃんに紹介された人」

「どこのどんな人？」

「誰でもいいじゃん」

「いや、どんな人と会っているかは親にちゃんと報告しなきゃだめよ。いざというときのために」

「いざ、ってどんな時よ？」

「変な事件に巻き込まれたりしたときのためよ」

こんなときだけ母親らしいことを言う、と花子は心の中で悪態をついたが、隠しておくことでもないので、ナオキの人となりについて、簡単に説明をした。

「あら、将来有望な方なのね。弁護士夫人なんていいじゃない」

「なれるか分からないけどね」

しかし母親は、かなり機嫌よく、娘が弁護士夫人になることを想像して悦に入り始めた。

花子はその様子を見ながら、(『ガラスの動物園』のようだ) と心のうちで独り言ちた。

キスをしたことで弾みを得たのか、ナオキは頻繁に花子に連絡をよこした。トモユキからも相変わらず連絡は来ていたので、花子は一時的に男性インフレを起こした状態で、読書もままならなかった。しかし、ナオキからの連絡が増える一方で花子の感情が逃げ腰になってきているのもまた事実だった。

その翌週も二人で美術館に行き、帰り道に彼は自分の部屋に花子を誘いたい気持ちがありと出していたが、花子はどうしても行く気になれなかった。どうしてなのか、花子は自分自身でもはっきりとわかりかねていた。色々と考えた挙句、思いついた答えは、やはり、たとえいまナオキと付き合ったとしても彼が晴れて弁護士になった暁には捨てられるのではないか、という不安だった。それがたとえば二年後のことだとすると、花子は三十四歳になっっている。三十四歳でまだ二十代の弁護士の彼氏に捨てられることを考えると、それだけで、鳥肌が立った。これはなかなか難しい状況に追い込まれたな……。と花子は思った。

しかしナオキ君も若いので、花子のにえきらない様子に苛々しはじめたようだった。花子は百合子に相談し、また相談相手にふさわしいかは分からなかったがトモユキにも相談した。ヴェリテでは、シヨウにも相談した。三人の恋愛強者の意見は、つまるところ一致していた。

「一回やってみたら？」

それができたら簡単なだろうが、それができないから悩んでいるんだろう、と花子はまた心の中で苦笑いをするのだった。

しかしもっとも異様な反応を示し続けたのが母親だった。母親は花子が弁護士夫人になる妄想が気に入ったらしく、たびたび、ナオキとのことに探りを入れてきた。花子にはそれが鬱陶しいこと限りなかった。

「弁護士夫人になったら、私にマンション一部屋くらい買ってちょうだいね」

などと、しゃあしやあとのたまう母親に、花子は空いた口がふさがらない気持ちでいた。そんなある日、花子の方が母親よりも平日は帰宅が早いことが多いので、マンションに着くと常のように、郵便ポストを確認し、主にチラシや電気・ガスの請求ハガキをこそっと持って部屋に入った。見ると、電気会社からの請求ハガキには

『重要』すぐに開けてください』

と赤く大きな文字で記載があり、嫌な予感がしたので、花子はハガキを開いて見た。思った通り、何日までに振り込まれないと電気を止めますよ、とある。水道光熱費は母親が払うことになっていて、花子はその分家賃を多めに払っていた。

あの人はまだこんなだらしないことをしているのか、と激しい怒りが体を震わすように込み上げてくるのを花子は感じた。

しばらくして帰ってきた母親を

「このハガキなに？ 電気止められるってさ。ちゃんとお金払ってよ」

と問い詰めると、母親は

「わかっているわよ、こちらにも考えがあるの」

と居直りを決め込んで、ハガキを彼女の手から取り上げた。花子はこの期に及んでまだ我を通そうとする母親に殺意に似たものすら覚えた。

「そういうだらしないことをして、お金のことで私に迷惑かけないでね」
すると母親は花子をきつとにらみつけて言った。

「あんたがちゃんと勉強してもっと良い大学に行ってくれてたら、今頃もっといい暮らしができてたのに」

(何を言っているのだろうか?)

花子は怒りのあまり言葉を失った。

「私はあんたに国立大学に行ってほしかったのよね」

花子は内心、またか、と思った。これは彼女が高校卒業後にアメリカの大学に進学しようとして不合格になり、あわてて受験をして、さほど偏差値が高いわけではない大学に入った時からの母親の決まり文句だった。

「高校二年のときに真面目に受験しようと思ったけれど、入れたのに。そう担任の先生も言っていたのよ。あんたが勉強しなくなったから私は子育てを諦めて好きにするようになったんだから。全部あんたのせいだからね」

何度聞いたことか、これを三十路を過ぎても言われないといけないのか。

「じゃあそういう風に私を育てればよかったじゃん。自分が大学も出てなくせに分不相応に子供を育てようとするから自業自得でしょ。無理やり私立の学校に入れてさ。奨学金だって借金なんだから結婚にも不利になるし。お母さんの存在が私の人生の邪魔になってるって気づかないの?」

花子はつとめて感情的にならないように、できる限り理性的に母親に自分が長い間ずっと思い続けてきたことを、ここぞとばかりにぶつけた。それは殆ど生まれて初めての花子の筋道だった母親への口ごたえだった。口達者な母親を言い負かせないことが幼少のころから彼女の口下手を助長していたが、母親の老後が見えてきた今、立場はもはや逆転した、と花子は感じた。それは単純に面倒を見る側見られる側の力関係の逆転に他ならなかった。そしてそれは、花子の勝利でもなんでもなく、単に彼女の足かせの重さを立証するものでしかなかった。

母はよほど傷ついたのか、反論することなく無言で部屋にこもってしまった。花子はそれでも夕飯を食べないといけないので、外に出た。行く場所は三軒茶屋の例の店以外、思いつかなかった。

百合子にメッセージを送ると

〈あー今日はちよっと用があって行けないんだ〉

と返答がきた。花子は少し出鼻をくじかれた気持ちになったが、一人で夕飯を食べるのも気分的に虚しいものがあったので、やはりヴェリテへ向かうことにした。トモユキに連絡するかどうか迷ったが、寂しさに勝てずに電話をしてしまった。しかしトモユキもつながらなかった。こういう日に限って、と思いつながら花子はすでに重くなった気持ちを抱えて、二子玉川の駅のホームで電車が来るのを待っていた。

最後の手段として、ナオキのことも頭に浮かんだが、毎日零時近くまで勉強している人に勢いで連絡するのとはばかられたし、そもそも彼にイチから説明できる状況でもなかった。彼女の経済状況、電気料金もともに払わない親。そんなことを好意を持ってしてくれる相

手に話す度胸はなかった。それはまた、他の友人やトモユキですらも同じことではあったけれど。

目の間に広がるうごめく闇の中の多摩川は、街の灯を反射させて生き物のように横たわっていた。この川に飛び込むときは今なのではないか？ とふと花子は思った。そう思うとふっと笑いが込み上げてきた。なんでこんなクソ寒い中、川に身投げしなければいけないのか。たしかに私の人生は殆どつんでいるが、だが、まだ完全につんだわけではない。将来有望な若者に執着されるくらいの女としての価値はまだあるみたいだし、セフレだっている。世の中にはもっともつとつんでる人が大勢いるのだ。まだまだ、あきらめるわけにはいかない。

そう考えていくと、妙にポジティブな気分になってきて、花子はわざわざ三軒茶屋に向かう意味がなくなったと感じ、電車に乗らずに家路へと引き返した。駅前のマクドナルドでハンバーガーとポテトとチキンナゲットを買って帰る。帰宅するとリビングルームの電気も消えていて母親は早々に寝てしまったらしかった。花子は自分の小さな四畳半の部屋でマックで買った夕飯を平らげると、自身も早々に寝てしまった。まだ木曜日で平日だった。明日もまた、仕事があるのだ。

母親との喧嘩はいつもそうのように、翌日には何となく普通に会話をすることで解消されてしまった。それでも花子は自分の本心は伝わっただろう、といい気になっていた。そしてそれは、ある種の解放感を花子に与えてくれた。もはや自分は誰を選んで結婚して家を出て行ってもいい。もちろん、こんな母親でも広い心で受け止めてくれる夫であればそれに越したことはないが、その必然性におびえて暮らす必要はもうないのだ。

週末、関係性を曖昧にしたままだったナオキ君とヴァレンタインデートにかけた花子は、帰り道で、ついに彼からあと一週間以内に答えを出してくれ、と言われてしまった。一週間後の土曜にもう一度会おう、と約束して、重い気持ちを抱えたまま花子はナオキと別れた。

花子はどうしていいか分からず、帰り道にトモユキに電話をした。トモユキは無責任にとりあえず付き合ってみれば？ などと言ってきて、それもまた花子を苛々させるのだった。こいつがいるから私はナオキ君へと踏み切れないのではないか？ こいつとの関係を清算するなら今なのは。花子はそう思って、思い切ってトモユキに

「私と本気で付き合う気はないの？ ないんだったら、もう連絡しない」と、やけくそで迫った。トモユキはその瞬間に明らかに声のトーンを落とし、

「それなら仕方がないな」

と答えた。それは明らかに拒絶だったので、花子は迷わずに電話を切ることができた。にもかかわらず、花子は自分の心を立っていられないほどの猛烈な悲しみが襲ってくるのを感じた。家に着くまでにすでに泣き始めていたが、自分の部屋に入ると服も着替えず、ベッドに突っ伏して盛大に泣き、様子を伺いに来た母親に心配された。しかし、母親はなぜ泣い

ているのか、とは聞かなかった。花子はなんとか顔を洗って着替えると、泣きながら眠りについた。

翌日起きてもまだ立ち直ることができず、いつも通り会社に行って仕事はするものの、やはり身は入らずに、花子は何度スマホを見ても来ていないメッセージに肩を落とし続けた。そして自分でも驚くほど絶望していることに気が付いた。

それほどトモユキに依存していたのか、と花子はおそろしく思った。何か月も途切れることなく連絡をとる、ということがどれほど彼女の心の隙間を埋めてしまっていたのかに。自分にはリストカットをしたりはしないが、このあふれ出る悲しみは、リストカットに相当するほどの悲しみだと思われた。もう一度、同じようなことがあれば、その時は生きていくことはとてもできないだろう、というような。

だが、悲しみに沈んでいる暇はなかった。花子はここで放蕩息子の自称ミュージシャンに別れを告げ、将来有望な若者と希望あふれる関係をつくらなければならなかった。花子は土曜日に、ナオキの告白を受け入れようと、決意を固めた。

けれども、その土曜日の朝に、トモユキは再び電話をかけてきたのだった。午前十時頃で、花子はまだベッドの中にいた。寝ぼけた状態で電話をとると、声が枯れ、何か切羽詰まった様子で「今から渋谷来て」という。そんなことできるわけがないので、「無理無理」と言うて切ったが、明らかに風邪をひいているようなトモユキの声が、花子は気になった。どうせまた朝まで飲んでどこかのキャバ嬢をひっかけてラブホテルにしけこんでいたのだろうが、そんな体調なのであれば今すぐ帰宅して寝るべきだ。花子はそう思って、そのようにメッセージを送ったが、返答はなかった。薄汚い街の片隅でぶったおれた酔っ払いとして連行されればいい、と花子は明確に思った。

その夜六時に表参道で待ち合わせをしていて、花子より少し遅れてきたナオキ君の表情は硬かった。

「この辺、俺あんまり詳しくないんですけど、どっか良い店知ってますか？」

と、前回までは用意周到に店を予約していたナオキは、ちょっとこれまでと違う態度だった。花子はいくつか案を出し、二人はその中で一番近いと思われたカフェレストランへと向かった。

酒に強いナオキは赤ワインを一本頼み、それぞれオムライスとハンバーグプレートを注文して食べた。重要な話題は暗黙の了解で食後にとっておかれ、食事の間の話題は何かそらぞらしかった。食後にはナオキがアイスを、花子はチーズケーキと紅茶を頼んだ。デザートがきたところで、ナオキが重々しく口を切った。

「それで、こたえなんですけど……」

彼はとても真っ直ぐに強い視線で花子をとらえた。こういうことは若くなくてはできないな、と花子は感じ、またその圧に耐えられずに目を伏せた。

「あの。色々考えたんだけど、お友達からってことで、どうかな？」

「……。それは付き合ってくれるってこと？」

「はい」

花子は逃げ場がなくなつてそう答えた。だが、それは彼女が決めたことだった。たとえば、その返事が完全な喜びを伴っていないなくても。

「ありがとう。じゃあ、よろしくね」

ナオキ君は笑つたが、花子の表情が浮かないことが明らかでないか、やはりさほど嬉しうではなかった。

「もっと俺のことを好きになってくれるといいんだけどな」

「もう好きよ」

花子は笑顔をつくつて彼にそう言った。

「ほんとかな？」

若い男はまだ完全に信じ切つたわけではなさそうだったが、それでも嬉しいは嬉しいらしく、今日初めて素直な笑顔を見せた。

「じゃあ、今日、家に来ますか？」

「今日は、ちょっと。ごめん、明日朝早いから……」

「なんだよ。まあ、確かに早いよね。ごめん」

ナオキはそう言つて、アイスの最後の一口を食べ終わった。が、多少不服そうではあつた。実を言うと、明日は別に早くもなんともなかった。夕方、ショウがヴェリテの上階にあるライブスペースでミニライブをやるので一緒に行かないかと百合子に誘われているくらいだった。

店を出るとナオキはかなり酔つていて足元もおぼつかないほどだった。たしかに一人でワインを一本空けたのだから不思議ではなかった。彼はさすがに不安を覚えたらしく

「俺こんな状態だから、駅まで一緒に来てくれない？」

と頼んできた。花子が迷っていると電話が鳴つた。見ると、トモユキからだつた。さすがにこのタイミングでは出られないと無視していると珍しく何度も鳴つた。花子は諦めて、

「ごめん、親からだ」と断つて電話に出た。

「はなたん、どこにいる？ もうあかん。わし死ぬ」

「なに？ きこえない。私外にいるの」

「はなたん、来て。たのむ、おねがい」

「だからご飯はもう食べたよ。じゃあ切るね」

ナオキの手前、母親と話すようなふりをして切つたが、花子はトモユキの状態が気になつて仕方がなくなつた。若者は電話に不信感をもつたのか「お母さん、随分心配性なんだね」と冷やかかな口調で言つてきた。

彼が乗る電車は反対方向だが、ナオキはいつもそうするように、花子が乗る線のプラットフォームまで見送りのために着いてきた。しかし彼は終始辛そうで、何度も花子に「最寄り駅まででいいから一緒に来てくれない？」と頼んだ。だが、花子がかたくなに断つた。彼についてプラットフォームのベンチに座り込んで頭を抱えた。それでも花子の気持ちは傾か

なかった。むしろ、トモユキのことが気になっていった。おそらく、電車がきたらそれに乗って渋谷にいるのであろうトモユキの所に行ってしまうことになるだろう。

「俺たち、付き合うことにしたんですよね？」

ナオキは顔を上げて花子に言った。彼の目はこわばっていた。

「今日来てくれないなら、それはなしてことでいいですか？」

「うーん。友達からって言ったよね？」

「それは詭弁だ」

彼の目は怒りを帯びた。

「とにかく今日はダメなの。今日は一人で帰ってね、お願い」

「分かりました」

ナオキは立ち上がるとよろめく足で階段を下りて行った。その後姿を見ても、花子は多少可哀想な気持ちはあるとは言え、自分の判断を覆すほどの感情が湧いてこないことに、われながら無情を感じた。

（だって、あなたは恵まれている）

それは、花子の波立たない感情の奥で、ただ一言だけ、聞こえてくる言葉だった。

（だって、あなたには輝かしい未来があって、今ちよつと辛かったとしても、それはあなたの人生に何の影響も及ぼさないほどのかすり傷にすぎないのだ）

花子は電車に乗るなり、「いまどこにいるの？」と、トモユキにメッセージを送った。だが、返ってこなかった。渋谷についてもまだ返信はなかったが、花子とはかく電車を降りた。電話をかけるとトモユキはつながった。

「すまん、すまん。店の地図URLで送るから、それ見て店まで来て」

案内普通の様子に腹は立ったが、それでも向かうしかなかった。トモユキから送られてきたバーの地図に従い、花子は道玄坂の方向へむかった。初めて行く場所なので迷っているとトモユキから電話がかかってきた。

「まだつかんの？」

「まよってる」

「近くなったら電話して」

ようやく道玄坂の上まで着くと、またトモユキから電話がかかってきた。

「いまどこ？」

「もう道玄坂ついた」

横断歩道の反対側を見るとダウンジャケットを着た金髪の男が立っていた。信号が変わって近づいていくと、トモユキは数日間飲み続けていたのだろう、目はすわり、なんとなく老け込んだように見えた。出会い頭にキスをしてこようとしたが、それは避けると「なんやあ、ぼけえ」と回らない舌で悪態をついた。声はやはり枯れていた。

「もうさあ、風邪ひいてるんだから、早く家に帰りなよ」

「ああ、もう帰る。あと一杯だけ」

そう言って、地下に降りる階段をくだって一軒のバーにたどりついた。入るとそこはヴェリテヤ、初めてトモユキと寝た日に連れていかれた同じ渋谷のバーよりも、高級な雰囲気のお店だった。バーテンはやはりイケメンの若い男だが、シヨウよりも落ち着いた空気をまとっていた。

「これがはなちゃん。よろしく」

といつかもされたような紹介をされて、花子はトモユキの隣に座った。

カウンターには、五十は過ぎているだろう建設会社社長、といった態の体格のよい男性とその連れ合いの水商売風の三十代後半に見える女性、あと二人組の三十代後半から四十代と見える男がいて、一番奥にやはり水商売風の四十は越していそうな女が一人で座っていた。年齢層もヴェリテヤより高く、客層に落ち着きがあるのは場所柄とも思えた。そのなかで、トモユキは浮きそうな感じがしたが、案外馴染んでいて、バーテンにたのんでギターをもつてきてもらい、弾き始めた。トモユキがギターを弾いているのを見るのは、花子は初めてだった。社長風の男が「にいちゃん、〇〇弾いてくれよ」と演歌をリクエストしてきたので、花子はトモユキに指示されてスマホでギターのコード表を検索し、トモユキはそれを見ながら演奏した。水商売の女が歌をあわせた。かつては歌番組でアーティストの伴奏をつとめたこともある、というトモユキの腕前は、素人耳にも悪くはなさそうだった。

そのうち白い小型犬を連れて四十過ぎくらいの男が入ってきた。トモユキはそのポメラニアンとチワワの相の子だという美しい犬を気に入って「ワンダフル」とか言いながら、何度も抱かせてもらおうとしたが、犬が嫌がるので何度も取り上げられて、そのたびに恨めし気な顔をしていた。

「おねえさんは、なんでこんな男とつるんでるの？」

と突然、社長みたいな男に花子は声をかけられた。

「さつき、こいつが女が来るからって迎えに行ったとき、どうせキヤバクラのネエチャンみたいな女を連れてくるんだらうと思ってたら、あんたみたいな清楚な綺麗な子がきたから、俺びつくりしちゃったよ」

「はあ、ありがとうございます」

「こんな酔っ払い野郎の相手してやってさ、あんた、本当にいい女だと思うよ」

「おやじさん、そんなこと言わんでよ」

犬に見放されたトモユキは男のそばに寄って行って、「わしも一生懸命いきとるんやで」と息巻いた。

「うるせえな、さつきから女に電話ばかりかけに行きやがって」

「おやじさん、それは言わん約束でしょ」

トモユキはだいぶ酔っていた。こわもてのオジサンに殴られればいい、と花子は内心思っていたが、オジサンは「でも、こいつ馬鹿だけど、何か憎めないよな」とけなしているのだから褒めているのだからよくわからないことを言い、トモユキはまた犬のところに行きやがって、犬の飼い主は辟易していた。

「しかし、おまえ、どうやって生計たててんの？ ギターだけでやってけんの？」

オジサンの質問に酩酊状態のトモキはまともに返事をしなかった。するとバーテンの男がこたえた。

「トモさん、実家が金持ちなんですよ」

「ああ。そう」

その一言は、店の空気を少しだけ変えた。

「んなことないわ。でも実家帰ると、おばあちゃんが五十万お小遣いくれるけどな」

なぜかその時だけ、はつきりとした口調で口を挟んで、トモキはまた犬に絡んだ。店の空気は少し乱れたままで、花子は、さっきは聖女のような扱いをうけていたのが

(なんだ、金目当ての女か)

とオジサンをふくめ、その場の全員にはつきりと心中で思われただろうと、確信をした。

夜中の三時頃、ようやく店を出たが、帰る気の無いトモキはやはり、花子をラブホテルへと連れて行った。しかも恥知らずにも、宿泊代は割り勘でたのむ、と言ってきた。人を呼びつけておいて、金を出せとは何事だ、と花子もいよいよ財布のひもを固くしようと決意したが、金目当てなどからは程遠い現状に苦笑せざるを得なかった。

泥酔のトモキはセックスもままならず、二人とも疲れ切っていて早々に寝てしまった。起きてからも試そうとしたが、三日ほど飲み続けていたというトモキは最早使い物にならず、花子は呆れてしまった。

「何でそんなに飲みまわってるのよ？ 体調も悪いんだし早く家に帰りなよ」

「うーん。かえりとうない」

「なんでよ」

「一人になりたくない」

「はあ？」

「お母さんが死んだのがなあ、つらいんや」

何を言っているのか、と花子は一瞬言葉を失ったが、トモキの表情と声音に嘘はなかった。

「つらいなあ、やつぱり。俺がちゃんと仕事せんようになったのも、お母さん死んでからやからなあ」

そう言って男は泣き出した。花子は焦った。

「そうね、それは辛いと思うけれど。でもお母さんのためにも、しっかり生きないと」

「そんなことできん」

トモキは花子の言葉をつっぱねた。

「私はまだ家族を亡くしたことがないから、何とも言えないけど、でもそれを理由にして、今みたいな生き方してたらだめだと思っのよ」

「分かっても変えられないんや」

なんと言っているのか分からず、花子は口をつぐんだ。

ホテルを出る時間になり、花子はこのまま帰ろうと思っていたが、男は引き留めた。金は出さない、と頑なに花子が拒むと、今俺、手持ちがないんや、と、とうとう七千円だけ花子から引き出して、あとでコンビニのATMで金を下ろすと言う。ラブホを出て、コンビニに行く、確かに金は下ろした。だが、そのついでに缶チューハイを買ってきて飲みだした。男がひっきりなしに酒を飲んでるのを見て花子は、これはアルコール中毒かもしれない、と思い始めた。

花子はさっさと帰らなかったが、トモユキがどうしても昼飯を食べたい、というのでそれだけは付き合うことにした。焼き肉を食べたい、というので、手近な焼肉屋に入った。

男は、ランチの焼き肉定食と、ウーロン杯と、冷ややっこを注文した。いよいよ酒の止まらないトモユキを見て、花子は心配になった。

「ねえ、もうお酒飲むの止めなよ」

「ああ、これ飲んだら止める」

たしかにグラスを持つ手は震えていた。完全なアルコール中毒の症状が見えていた。

「もうアル中になってるじゃない、お酒、本当にやめなよ。死んじゃうよ」

すると、もう完全に目がすわっているトモユキは急に声を潜めて

「ええんや、俺はもう死ぬんや。さつきコンビニでウイスキーの瓶一本買ったからな。うち帰ったら一気飲みして死ぬんや」

と神妙に言い出した。花子はそれを聞いて焦った。

「やめなよ、死ぬなんて。冗談でしょう」

「もうええんや、死にたい。お母さんのところへ行きたい」

と言ったかと思うと、トモユキは突然、七輪の中に嘔吐した。

「え、やめてよ」

と花子はますます焦り、トモユキの隣に席をうつしたが、男はげろげろとそのまま七輪の中に胃の中のものを吐き続けた。

「ねえ、大丈夫？」

花子はビニール袋をとりだして、そちらに吐くように促した。すこしビニールの中に吐いて、またトモユキは七輪の中に吐いた。

「ちよつと、ありえないよ。店に迷惑だし、やめなさいよ」

トモユキはおしぼりで口を拭くと、また酒に手を付けた。そして、スマホで友人に電話を始めた。

「俺、もう死ぬわ」

そう何人かに電話して告げると、今度はショウウに電話をかけた。

「ショウウ出るから代わって」

とスマホを渡された花子は寝起きの声のショウウに「誰？」と聞かれ「花子です」と答えた。

「ああ、はなちゃんね。なんでトモさんと一緒にいるのよ」

「ああ、まあちよつと色々あって。なんかトモさん、アル中みたいで、死にたいって言って

るんです」

「はあ？　それで、あんたたち、今どこで何してんの？」

「渋谷で焼き肉食べてます」

「……。はなちゃんさあ。今から死ぬやつが焼き肉なんて食わねえだろ。ほうっておけば（たしかに）と花子は納得した。

トモユキが代わってくれというので、スマートフォンを渡すと、またトモユキは電話越しに泣き出した。

「俺、もうつらいわ。死んでお母さんの所に行くわ。もう遺書も書いてあんねん。俺が死んだら、俺のもっとるクロムハーツ、全部あんたにやるわ」

そして渋谷に来てくれ、とトモユキはショウに頼んで、電話を切った。

「あのさあ、何でショウさん呼んだの？　彼女呼べば？」

「そりゃあ、何日も飲み歩いて家帰らなければ怒るでしょう」

「もう連絡こんかもしれんなあ。俺の回りからはどんどん人がいなくなるなあ」

そう言ってまた泣き出したトモユキの背中を花子はなでた。

「だったら、人がいなくならないような生き方をしなさいよ」

それでもトモユキはまだ懲りずにウーロン杯を注文しようとして、様子がおかしいことに気が付いた店員に「もうお出しできません」と言われ、それでも酒が切れるのが不安らしく、ビニール袋から自殺のために買ったというウイスキーのボトルを取り出した。しかしそれは一八〇ミリリットルの小瓶だったので、花子はこんな量で本当に死ぬのか？　とつぶかしく思った。

花子が男をなだめたりすかしたりしている間に、トモユキは母親の思い出を色々と語り出した。自分がバックミュージシャンとして出演する音楽番組を欠かさず録画してくれていたこと、宝石を集めるのが趣味だったこと、葬式に大勢の人が集まったこと……。いかにも地方都市の資産家の奥様らしい様子がうかがえた。花子は、トモユキをうらやましく思った。自分の母親は、九州の田舎から夫と別れて娘一人つれて上京した母親と、母子寮に入り、公営住宅にうつって、祖母は一生を公営住宅で終えようとしている。公務員だった祖母は年金で十分気ままな生活は送れているが、母は、そうはいかないだろう。女手一つで育てられ、弁が立つという能力をいかしてアナウンサー養成の専門学校に入り、若い頃はイベントの司会業やラジオのディスクジョッキーもしていた、という花子の母だが、華やかな世界の端で、ちららちららと青春を過ごしたツケが今、回ってきているのだろう、と花子は思っていた。

トモユキにとって、最愛の母親がいなくなった実家は寂しいだろうが、家があることが、おそらくは広い土地に立つ大きな家を故郷にもっているということが、花子には、非常に恵まれていて十分幸せなことに思われた。トモユキは当然死なないだろう。結婚すらするかもしれない。私はもう、人生つんでいる、というのに。

スマートフォンを見ると、ナオキから着信が入っていた。メッセージも来ていた。花子はそれを読むのが怖くて、携帯の電源を落とした。そうこうしているうちに、シヨウからトモユキに電話がかかってきた。トモユキはまた花子に電話をとらせた。

「渋谷着いたから、店の外で」といって

シヨウに居場所を伝え、店の外に出る。冬の晴れた日で空気は冷たかった。アル中の男と二人で、渋谷のドン・キホーテの前の植込みの囲いのレンガに腰かけ、やたらとウイスキーの小瓶に口を当てようとする男の手から瓶を取り上げて、花子は自分の鞆の中にそれをしまった。五分ほどでシヨウが来た。夜のミニライブにむけて気合を入れているのか、髪を後ろに結わって、いかにもタダモノではない雰囲気をもっていた。トモユキは、頼りにする父親か兄が迎えに来てくれたときの子供のように、妙にはしゃいで突然元気づいた。

「とにかく俺はすぐに三茶に戻らないといけないから、三茶にタクシーでむかうよ」

とシヨウは言い、トモユキは「ああ、三茶に行こうや。タクシー代は俺がだからな」と言った。センター街でタクシーを捕まえると、246をくだるタクシーの中で、花子とトモユキとで交互に昨晩から現在にいたる状況を説明した。シヨウはあきれ顔で聞いていたが、「で、トモさんは何日家帰ってないの？」

「三日やな」

「それで、何で昨日、はなちゃんはトモさんと一緒にいたの？」

「呼ばれたから」

「何時頃？」

「十時ごろかな」

「それまで何してたの？」

それは鋭い追及だった。花子はちよつと間を置いて、「ご飯食べてた」と返した。しかし、その間が気になったのか、シヨウはさらに追及をかさねた。

「だと？」

「最近デートしてた男の子」

「え、あの弁護士めざしてる年下の男？」

「ああ、そいつとどうなったん？」

トモユキはしれつと聞いてきた。

「昨日、付き合うことにしたんだけど、なくなったかもしれないね」

「え、どういうこと？ 付き合うことにしたのに、トモさんから呼び出されて渋谷にきたの？」

「うん」

「それ、相手知ってたの？」

「知りはないけど、でも、多分、付き合うって話は無しになるとおもう」

その時初めて、一人助手席に座っていたシヨウは振り向いて花子の顔を見た。

「あんた、筋金入りの馬鹿だな」

(そうかもね)と花子は心の内でこたえた。

「まあ、そういうこともあるな」

トモユキがしたり顔に言い、花子は口の端を曲げて笑った。

三軒茶屋のシヨウの店まで来ると、宣言通り、トモユキがタクシー代を払い、三人は開店前の店に入って、シヨウは開店準備とライブの準備を始めた。しばらくすると、百合子がやってきて、まだ暗いカウンターの花子の隣の席に座った。おそらくシヨウが気を利かせて彼女を呼んだのだと思われた。

「花ちゃん、大変だったんだってね。トモさんアル中なんですよ？」

トモユキはカウンターにうつぶして寝ていた。

「うん。てゆうか、ごめん、私ナオキ君にとっても失礼なことをしたかもしれない」

「あく。どうなったの、彼とは？」

「それが、まさに昨日を締め切りにこたえを出してくれって言われてただけど、それで付き合ってたんだけど、トモさんから呼ばれて渋谷いっちゃってさ。怒ってるかも。もう付き合えないと思う……」

「ふーん。でも仕方ないんじゃない？ 好きじゃなかったんでしょ？ 彼のこと」

「わかんない。いい子だとは思ってたけど。なんか、でもこれから弁護士になって、弁護士になった男の子が私みたいな三十代半ばの何のとりえもないOLを好きでい続けてくれる自信がなかったんだよね」

「なるほどね」

百合子はうつぶしているトモユキを眺め、花子に視線を戻し

「ナオキ君についてはそこまで客観的に考えられるのに、トモさんにはずいぶん献身的に優しくできるんだね」

そう言った百合子の笑顔があまりに美しかったので、花子もつられて笑ってしまった。

「そうねえ。べつにこの人を本気で好きなわけではないんだけど」

百合子はまたトモユキをしばらく眺めていたあとで、口をひらいた。

「シヨウ君さ、結婚するんだって」

「え？」

寝耳に水の情報に、花子は驚愕した。

「ずっと付き合っていた彼女と」

「え、そんな人いたの？」

「女が沢山いるのは分かってたけど。まさか結婚とはね」

百合子は花子の耳に口を近づけて言った。

「さすがに結婚したらダブル不倫になっちゃうから、もうセックスはしないよ」

花子は百合子の顔をまじまじと見た。

「ねー。旦那以外とはできるのに、不思議よねえ」

百合子はそう言って、しばらく黙ったのちに、また口をひらいた。

「でもうちら、千葉に戸建ての家を買うことにしたの。春くらいに引っ越しする予定。遊びにきてね」

花子はまた百合子を見た。

「旦那とはいまだにレスだけどき。環境変えて、背水の陣しいちゃえば、何とかなるかなと思つて。そろそろ、子供も考えないとだし」

百合子はそう言つて、またしばしの間、だまつてから、

「ねー、私達、人生つんでるねー」

と、ため息まじりに言つた。

「そうね」

花子はそれだけ声に出して答えたが、そのあとは口には出さなかつた。けれども彼女の心の中では、はっきりと言葉になつていた。

（でもあなたには家があるじゃないか。トモユキにも、ナオキ君にも、シヨウにだつておそろく、どんだけつんでも、帰る家がある。でも、私にはない。ただ働き続けて家を買うしかない。足かせがあるだけだ。いいや、そしたら、私には多摩川がある。ほんとにつんだら、多摩川に入水すればいいんだ）

花子は、そう思うと、すつとカラダが軽くなるのを感じた。

五時になり、シヨウは店を開けて、常連の客がぼつぼつとやってき始めた。シヨウはいつまでもカウンターの隅に俯せているトモユキを扱いあぐねて、

「トモさんさあ、寝てんなら家帰つてよ」

と厳しい口調で言つた。

「ああ、もう起きる」

そう言つてもいつこうに起きようとしないうトモユキに、シヨウはさすがに堪忍袋の緒が切れたようで、突如、彼を店の外に叩きだした。

「今日大事なライブの日だから、悪いけど帰つてくんない」

客たちは面白がつてその様子をみていた。ふらふらのトモユキはしばし店の外でふらついていたが、どこかに消えたと思うと、また戻つてきて、酒をくれ、と言ひ始めた。またシヨウが彼を店の外につまみ出すと、またしばらくトモユキは消えて、そうして今度はコンビニで買つてきたウイスキーのミニボトルとともに店に戻つてきた。そうして、ボトルはシヨウに取り上げられて、また店の外に追い出され、そのやり取りを五、六回繰り返したところで、花子はいたたまれなくなつて、トモユキの腕をつかむと

「一緒にいくからお家にかえろう」

と言つて、男を外へ連れ出した。しかし酩酊状態のトモユキはやはりふらふらとして、どこか近くの他の酒場に入りたがつた。

「まだ帰らん。シヨウの歌をきいてやらな」

トモユキは、シヨウのライブをみたいのだ、ということも理解できたが、シヨウにつまみ

だされている以上はヴェリテに戻ることはできない。挙句の果てに、またラブホテルに行くとうとトモユキは言い出し、花子もさすがにこりこりした。時間はとくに六時を回って、冬の日は落ちていた。三軒茶屋の街は、相変わらずざわざわと、場末の空気をぞんぶんにまわって酒飲みのための夜を始めようとしていた。

どうしても三軒茶屋から離れたくなさそうなトモユキを抱えて、花子はどうするか迷っていたが、突然、もう帰ろう、と思った。今私がこの人を離しても、どうせなんとかやっていけるだろう。花子はそう思って腕を離し、

「じゃあ帰るね」

と言って、駅へと向かった。

「好きにせえ」

トモユキはそう言って、そのまましばらく人ごみの中でゆらゆらしていた。花子は急いで駅の階段を下りて行った。一人になると、急激に疲れがこみあげてきた。ああ、私、疲れていたんだな、と花子は思った。家に帰って、お風呂に入って寝よう。

帰宅すると母親がいて、なんだかそわそわした様子で花子を迎えた。花子は何も言わず、「何か食べ物ある？」

と聞いた。

「ないわよ、食べてくると思ったから」

母親は大仰に驚いた態度をしめた。花子は食パンとチーズを見つけて、チーズトーストにして食べることにした。

「昨日はどこにいたの？」

「どこでもいいでしょう」

花子の声で、母親は何か察したようで、口をつぐんだ。

質素な夕食を終えて花子が風呂に行こうとすると母親が言った。

「晚ごはん、家で食べるなら、ちゃんと連絡くらいしなさいよ」

「はい」

花子は母親を見ないで答えると、ダイニングキッチンの扉を閉めた。扉の向こうで母親が大きなため息をつくのが聞こえてきた。

風呂に入って、さつさとベッドに入り、寝際にようやくスマホの電源を落としていたことに気が付き、アラームのために電源を入れた。ナオキからの不穏なメッセージ通知があったが、花子はその対応は明日に回すことにした。

もう眠りに落ちる直前に、百合子からメッセージが入ってきた。

〈今日はお疲れ。トモさん結局もどってきて、ライブみて帰ってったよ〉

花子はそれにも返事をせず、眠った。

朝起きると腹痛がしたが、どうしても今日中にしないといけない仕事があったので休むわけにいかず、花子は出勤した。ちょうど昼休みの時間帯にトモユキから電話がかかってき

て、花子は仕事の用事で外を歩いていたが、電話をとった。

「はなたん、今日夜うちくる？」

「今日？ むりだよ、平日だしお腹痛いし」

「そうかく。さみしいわ」

「昨日はどうしたの？」

「友達に家に泊めてもらった」

「なんで家に帰らないの？」

「今タクシーでかえってるよこや」

「彼女まだ連絡取れないの」

「とれない」

トモユキの声が暗くなった。

「とにかく仕事だから切るよ」

「きりたくないなあ、さみしいわ」

「切りますよ」

電話を切った後、なぜか涙がでそうになるのが、我ながら馬鹿馬鹿しかった。

その日は珍しく、花子にとっては多忙な一日だったので、仕事に気を紛らわせてあつと言う間に夜になった。ただこなしていけば終わっていく事務の仕事を、花子は好ましく思っていた。何かを作り出すわけでもなく、お金をかせいでくるわけでもなく、ただ、目の前の仕事を淡々とこなしていく、テトリスゲームのような仕事。大きな達成感がない代わりに、激しいストレスにさらされることもなく、暇な時間をつぶして、お給料がもらえる。仕事をしている時間が一番幸せなのかもしれない、と花子は思った。仕事をしていないときの、彼女の所謂プライベートといえる時間は、馬鹿げた出来事にあふれていて、花子はもううんざりだと思った。あと、半年。半年後に借金を返し終えれば、少しずつ貯金ができるようになるだろう。少しずつお金をためて、このまま結婚しなければ小さなマンションの一室でも買おう。でもそうしたら、やっぱりそれでも、トモユキみたいな男がやってくるのだろうか？

花子が突然一人で頭を激しく振ったので、前の席に座っている経理の女性が驚いて、

「溝口さん、だいじょうぶ？」

と身を乗り出すようにして聞いてきた。

「はい、大丈夫です。ちよつと頭痛がして」

「そう、お大事にね」

品の良い奥様風の中年女性である経理担当者は、そう言うと、するすると自分の仕事に戻っていった。

帰りの電車の中で、花子はナオキのメッセージを見た。それは案外短いもので

「ご縁が無かったようなので、付き合うみたいな話はなかったことにしてください」

とだけあった。さっぱりとしていいね、と花子は思った。

「わかりました。返事が遅れてごめんなさい。元気でね」

そう返信したあとで、お約束の涙がまた溢れてきて、満員電車で人目もはばからずに花子は泣き続けた。誰と別れる時も、悲しみだけはやってくる。これは誰でもそうなのだろうか？ それとも自分が八方美人なだけなのだろうか？

用賀から二子玉川につくまでに田園都市線は地下から外に出る。車窓の外には、いつか、どうしやうもなくなつたときに花子を優しく迎えてくれるであろう、多摩川が、夕暮れの街の灯を水面にきらめかせながら、悠然と流れていた。